

神奈川県鎌倉市

西瓜ヶ谷やぐら群調査報告書  
—平成 27 年度 重要遺跡確認調査 —

平成 29 年 3 月  
鎌倉市教育委員会

神奈川県鎌倉市

西瓜ヶ谷やぐら群調査報告書

—平成 27 年度 重要遺跡確認調査 —

平成 29 年 3 月

鎌倉市教育委員会

## ごあいさつ

鎌倉市内には「やぐら」と呼ばれる中世の墓が数多く存在しています。特に山ノ内の瓜ヶ谷地区一帯には内部に五輪塔などを彫り込んだ特徴的なやぐらが集中的に分布しています。鎌倉市教育委員会では、瓜ヶ谷の西側に分布するやぐら群を市内でも重要な遺跡の一つとして認識し、平成17年度以降、この遺跡の基礎的な情報の把握や評価を目的として分布調査や発掘調査を実施してまいりました。

今回の調査では、新たなやぐらは発見されませんでしたが、中世にさかのほると考えられる石切場の跡が確認され、当時の人々が、やぐらという祈りの場所としてだけでなく、生産の場所としても山稜部の土地を利用していたことが明らかになってきました。

しかし、切り出された石がどこへ運ばれ、何に用いられたかなど、いまだ明らかにされていないことがらも多く残されています。今後とも、鎌倉の歴史の解明に努めてまいりたいと思います。

最後になりましたが、調査の実施にあたりご指導、ご助言をいただいた文化庁、神奈川県教育委員会、そして調査にご理解、ご協力をいただいた財務省関東財務局横浜財務事務所ならびに地元の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成29年3月31日

鎌倉市教育委員会

## 例言

本書は、鎌倉市教育委員会が平成27年度に実施した西瓜ヶ谷やぐら群に関する重要遺跡確認調査の報告書である。

調査は国庫補助及び県費交付金事業として、国庫及び神奈川県補助金の交付を受けている。調査にあたっては、文化庁文化財部記念物課理蔵文化財部門の指導に基づき、神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課の助言を受け、鎌倉市教育委員会が実施した。

本書掲載の発掘調査範囲は、遺跡名としては、鎌倉城（鎌倉市No. 87遺跡）、西瓜ヶ谷遺跡（同No. 213遺跡）、西瓜ヶ谷やぐら群2（同No. 319遺跡）にまたがっているが、事業としては平成27年3月刊行の「西瓜ヶ谷やぐら群調査報告書」に掲載した、平成17年度、24年度、25年度実施の分布調査・確認調査に連なるものであるため、上記報告書と同様、調査対象とした範囲全体の総称として「西瓜ヶ谷やぐら群」という名称を便宜的に使用する。

調査期間及び調査面積は以下のとおりである。

- ・調査期間 平成28年1月12日～平成28年3月1日
- ・調査面積 80.95m<sup>2</sup>
- ・調査指導 松島義章、山本輝久、河野眞知郎（鎌倉市文化財専門委員会委員）  
長岡文紀、恩田 勇、谷口 荘、林 正毅（神奈川県教育委員会文化遺産課）
- ・調査体制 調査担当者 永田史子  
主任調査員 後藤 健、伊丹まどか（地形測量）、押木弘己（地形測量）  
調査員 小野夏菜、梅園ケイト、渡辺美佐子（地形測量）  
調査補助員 香野知子、松吉里永子、佐藤千尋（地形測量）  
作業員 安達越郎、安藤宗幸、大澤清春、小口照男、加茂俊夫、寺尾征夫  
(公益社団法人鎌倉市シルバー人材センター)
- ・整理作業 主任調査員 後藤 健  
調査補助員 松吉里永子、佐藤千尋、吉田麻子
- ・協力機関、団体等  
財務省関東財務局横浜財務事務所、鎌倉市都市整備部公園課、鎌倉やぐらの森の会
- ・本書の執筆は、第1章を永田が、第2章及び第3章を後藤が分担して執筆した。
- ・本書に掲載した挿図・表・写真図版等は、後藤、松吉、佐藤が分担して作成した。
- ・本書の編集は、永田、後藤の協議に基づき、永田・後藤が行った。
- ・分布調査、発掘調査及び資料整理にあたっては、下記の方々及び機関からご教示、ご協力をいただいた（敬称略、順不同）。

松尾官方、古田土俊一、松吉大樹、平出利子、小熊重義、津田真人、有限会社安齊石工店

図版写真1



調査地点遠景（北から）



西瓜ヶ谷やぐら群 1号やぐら

図版写真 2



露頭した石切痕（トレンチ 6 上部、北から）



トレンチ 6 完掘状況（北から）

# 目 次

ごあいさつ	
例言	
口絵写真	
目次	
第1章 調査の目的と経緯	1
第1節 調査の目的	1
第2節 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の概観	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3節 瓜ヶ谷周辺の考古学調査	6
第3章 調査の成果	8
第1節 発掘調査の経過	8
第2節 地形測量調査	8
第3節 トレンチ調査	13
第4章 考察とまとめ	29
第1節 遺構の性格と時期	29
第2節 鎌倉石の石切場	30
第3節 石切の技術	31
第4節 まとめ	32
引用・参考文献	33

## 挿図目次

第1図	瓜ヶ谷周辺の地形と遺跡分布	3
第2図	瓜ヶ谷周辺の歴史的環境 明治15年迅速図	5
第3図	平成27年度調査地点全体図	9
第4図	尾根の地形	11
第5図	トレント4	14
第6図	トレント5、8、9平面図	16
第7図	トレント5、8見通し図	17
第8図	トレント5セクション図	17
第9図	トレント8、9セクション図	17
第10図	トレント5～8エレベーション図	18
第11図	トレント5出土遺物	19
第12図	トレント6平面・セクション図	22
第13図	トレント6中層かわらけ出土状態	23
第14図	トレント6南壁見通し図	23
第15図	トレント6エレベーション図	23
第16図	トレント6出土遺物	24
第17図	トレント6出土五輪塔	25
第18図	トレント7平面・セクション図	27
第19図	トレント7見通し・エレベーション図	28
第20図	鎌倉および周辺地域の主な石切場	30

## 表目次

表1	トレント5出土遺物観察表	20
表2	トレント5付近採集遺物観察表	20
表3	トレント6出土遺物観察表	25

## 写真図版目次

写真図版1	.....	36
写真図版2	.....	37
写真図版3	.....	38
写真図版4	.....	39
写真図版5	.....	40
写真図版6	トレント5出土遺物	41
写真図版7	トレント5付近採集およびトレント6出土遺物	42

# 第1章 調査の目的と経緯

## 第1節 調査の目的

西瓜ヶ谷やぐら群は、やぐら内部の玄室奥壁や側壁に五輪塔や板碑が、やぐら外壁面には宝篋印塔などの壁画彫刻がほどこされ、それらが良好な状態でのこっていることが最大の特徴である。

西瓜ヶ谷やぐら群に類似した壁画彫刻は、鎌倉市内では百八やぐら群、瑞泉寺裏山やぐら群、瓜ヶ谷やぐら群などに見出すことができ、それぞれ史跡覚園寺境内、史跡瑞泉寺境内および史跡仮粧坂として国指定史跡に指定されており、保護が図られている。

鎌倉市教育委員会は、平成17年度以降に周辺地域の詳細分布調査を含め西瓜ヶ谷やぐら群についての調査を実施してきた。当該やぐら群が、上記に列記した史跡指定地内のやぐらと同等な評価ができるかどうかの調査を目的として実施したものである。同時に鎌倉市内に多数存在しているやぐらのなかで、西瓜ヶ谷やぐら群についての学術的な評価を行うことも目的の一つであった。今回の重要遺跡確認調査は、これまでに行われた調査を補うもので、西瓜ヶ谷に存在するやぐら群及び尾根上の遺構について、切通周辺に展開し、中世鎌倉の「境界」領域を特徴づける遺構としての地理的・歴史的位置づけを明確にするために実施したものである。

## 第2節 調査に至る経緯

平成14年度に、西瓜ヶ谷やぐら群の存在する国有地について、もし売却されて当該地の土地利用が開始された場合、やぐら群がある丘陵全体に宅地造成等の開発行為が及び、遺跡が消滅する危機に瀕する可能性を懸念して、隣接地の住民によりやぐら保護の要望が述べられた。

これを契機として西瓜ヶ谷やぐら群の保護に関する取り組みが開始され、鎌倉市教育委員会では平成24年度以降にやぐら群の史跡指定検討を実施計画事業として事業化し、平成24年度にはやぐら群周辺の詳細な分布調査、平成25年度には重要遺跡の確認調査を行い、平成26年度に調査報告書を刊行した。なお、この間の詳細な経緯については、平成26年度刊行の報告書（鎌倉市教育委員会2015）に掲載されているのでそちらを参照されたい。

こうして周囲の状況を含めた西瓜ヶ谷やぐら群の基礎的な情報の収集と、歴史的な位置づけについて一定の成果を得たが、将来的にわたって保護をしていくためには、史跡指定が必要であると判断された。しかしそのためにはやぐら群の性質をより明確にすることが不可欠であり、平成27年度にやぐらが存在する尾根の構成を解明するために、追加調査を実施することとなった。

## 第2章 遺跡の概観

### 第1節 地理的環境（第1、2図）

本調査地点は、JR 横須賀線北鎌倉駅から主要地方横浜鎌倉線（鎌倉街道）を大船方面に 100m ほど北西方向に進み、十王堂橋の手前で約 500m 南西へ入った谷戸内に所在する。この地域は鎌倉を取り巻く山塊の西方で、鶴岡八幡宮の西方から山内、台、山崎まで連なり、一帯は台峰（山）と呼ばれる。大小の支谷が入り組んで複雑な地形となっており、そのうち瓜ヶ谷は尾根から流れ出る西瓜川によって南北約 800m にわたる大きな谷戸を形成している。東側には浄智寺の裏山金宝山、南側には葛原岡神社を包括する標高 80 m ほどの丘陵がめぐり、西側は台、梶原となる。

谷戸の中は大きく 6 の支谷が存在している。支谷からの沢水は合流して西瓜川となり、西瓜川は十王堂橋南側で明月川に、さらに下流で小袋谷川と合流する。谷戸の入口から 350m ほど南から支谷が分岐しており、谷戸内に南北に走る県道を境としてこれより先を東瓜ヶ谷、西瓜ヶ谷と呼称している。

谷戸内は山ノ内と梶原を結ぶ古くからの往還道があったと考えられ、「瓜谷路（道）」と呼ばれる。支谷の分岐を越えた辺りより次第に傾斜が急になり丘陵の頂上に至る。谷の開口から丘陵頂上までの比高は約 52m を測る。頂上からは道は東西に分かれ、一方は梶原へと通じ、他方は葛原岡方面に向かい仮坂坂へと続くと考えられる。旧道は現在の県道の西を通っていたと思われるが、鎌倉市指定史跡「瓜ヶ谷やぐら群」のある支谷最奥部には大堀切があり、そこから扇ヶ谷海蔵寺へ短距離で至るため、大堀切の構築年代は不明だがこちらも古くからの道であった可能性がある。

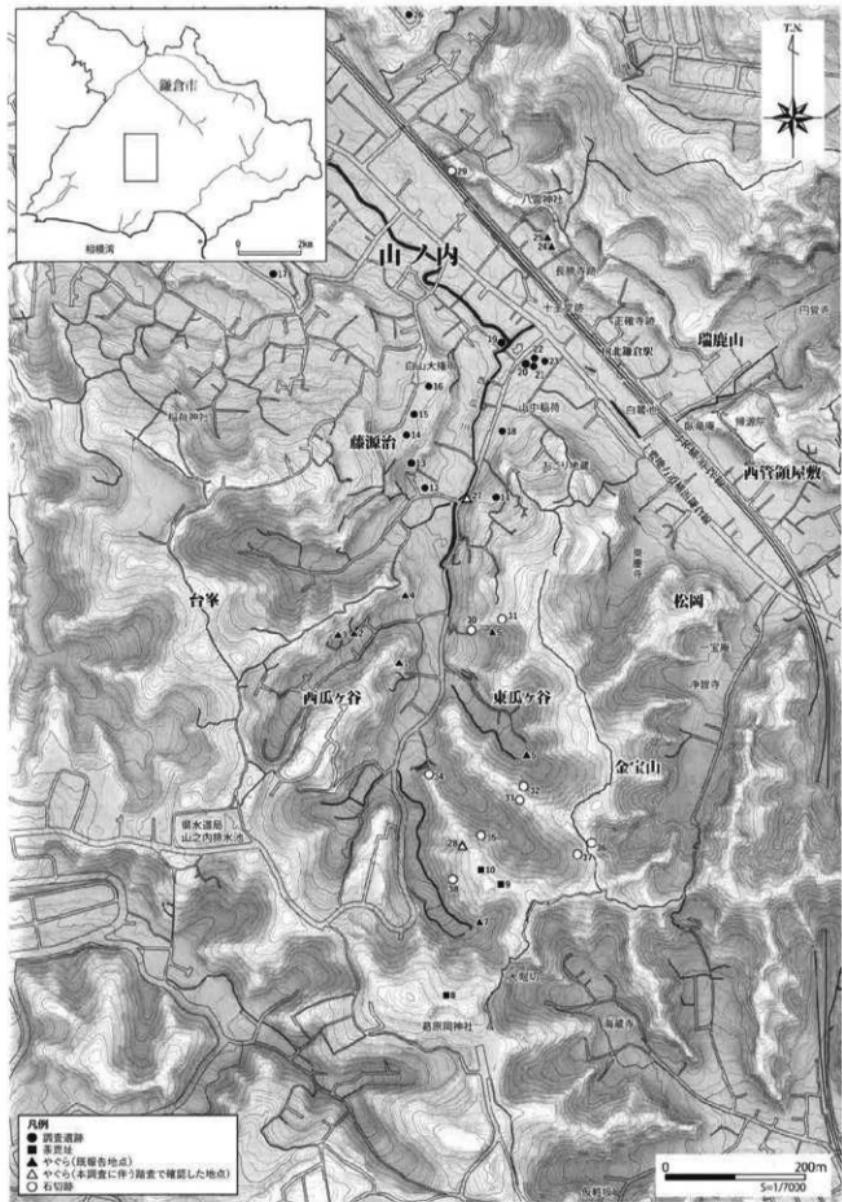
山塊は、後期鮮新世から第四紀前期更新世に堆積した凝灰質砂岩を主とした浦郷層・野島層を基盤としている。東瓜ヶ谷の丘陵から浄智寺のあたりが第三紀の逗子層や池子層との境となっているようであり、瓜ヶ谷一帯は浦郷層の未固結凝灰質砂岩が基盤となっている<sup>1)</sup>。仮坂坂周辺の分布調査<sup>2)</sup>では瓜ヶ谷最奥部の山腹に段状に平坦部が想定されている。瓜ヶ谷内部はそうした調査は行われていないが、地形をみると各支谷から谷の開口部にかけて尾根上には段状の平坦部が数多く存在している。

### 第2節 歴史的環境（第2図）

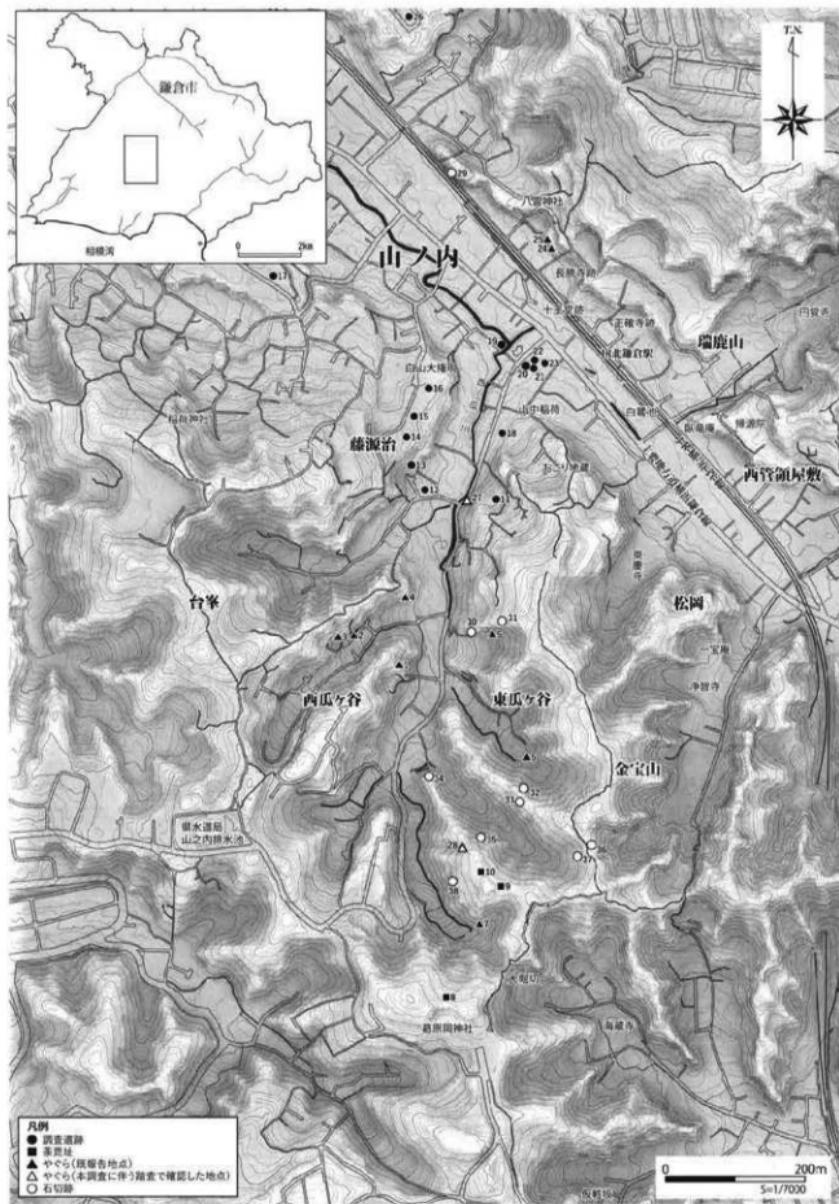
瓜ヶ谷の北側は平安時代後期に山内荘と呼ばれる荘園となっていた。正確な範囲は不明だが現在の北鎌倉から横浜市栄区にかけて広がっていたとされる。山内荘は鎌倉時代の初期までは山内首藤氏の所領となっていた。首藤氏は代々源氏の家人となり、首藤俊通がこの地に居を構えていたと考えられる。その子である首藤經俊が治承・寿永の乱では頼朝に与しなかったため、「吾妻鏡」治承 4 年（1180）10 月 23 日条には、頼朝の勝利後にその地を没収されたと記されている。この時に山内は土肥実平に与えられたようであるが、建暦 3 年（1213）の和田合戦で実平の孫惟平が和田義盛側について敗れたため、没収されて北条義時の所領となった。その後は鎌倉幕府の滅亡まで得宗領となっていたようである。

仁治元年（1240）10 月 10 日、10 月 19 日には、安東光成を奉行とし「山内道路」を造る沙汰が行われている。この山内道路は巨福路坂の切通のことであると考えられている。仁治 2 年（1241）12 月 30 日には北条泰時が「山内巨福礼別居」に入居する。元仁元年（1224）12 月 26 日には、泰時が四角四境鬼氣祭を行っているが、その際の四境は「東六浦、南小臺、西榎村、北山内」とあり、山内の八雲神社にはこの地が四境鬼氣祭の斎場跡であると社伝に伝わっている。

建長 2 年（1250）6 月 2 日には「山内井六浦等道路」の修理を北条時頼が命じている。正嘉元年（1257）



第1図 瓜ヶ谷周辺の地形と遺跡分布



第1図 瓜ヶ谷周辺の地形と遺跡分布

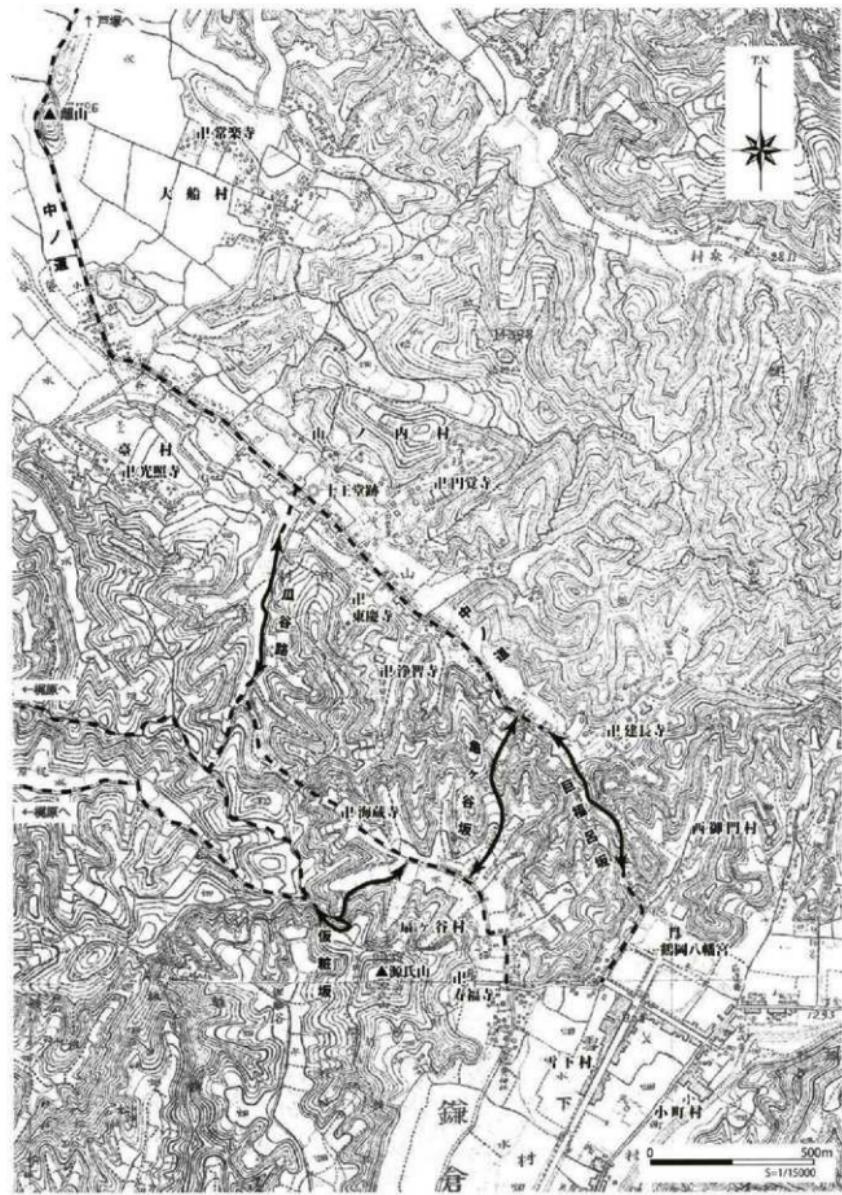
【図1に示した遺跡の出典】

- [西谷ヶ谷やぐら群] 1. 本調査地点 2. (鎌倉市教育委員会 2015 「西谷ヶ谷やぐら群調査報告書」)  
[瓜ヶ谷G 地点やぐら] 3~4 (鎌倉市教育委員会 2015 「西谷ヶ谷やぐら群調査報告書」)  
[瓜ヶ谷 A 地点やぐら] 5 (鎌倉市教育委員会 2015 「西谷ヶ谷やぐら群調査報告書」)  
[瓜ヶ谷 B 地点やぐら] 6 (鎌倉市教育委員会 2015 「西谷ヶ谷やぐら群調査報告書」)  
[瓜ヶ谷 D 地点やぐら] 7. 瓜ヶ谷やぐら群 (鎌倉市教育委員会 2015 「西谷ヶ谷やぐら群調査報告書」)  
[茶毘址] 8~10. (神奈川県教育委員会他 2001 「古都鎌倉」を取り巻く山稜部の調査)  
[西谷ヶ谷遺跡] 11. 山ノ内字東瓜ヶ谷 1294番4~5地点 (馬渕 2006 「市緊急報告書」22)  
12. 山ノ内字藤源治 928番1ほか (未報告)、13. 山ノ内字藤源治 928番1ほか (未報告)  
[台山遺跡] 14. 山ノ内字藤源治 914番 (手塚他 1985 「台山藤源治第1次」)  
15. 山ノ内字藤源治 914番 (宗泰 1993 「台山藤源治第3次」)  
16. 山ノ内字藤源治 914~917番 (大河内 1996 「台山藤源治第2次」)  
17. 台字西ノ台 1418番10地点 (押木 2015 「市緊急報告書」32)  
[円覚寺門前遺跡] 18. 山ノ内東瓜ヶ谷 1229番1~5 (小林 2006 「市緊急報告書」16)  
19. 山ノ内字藤源治 951番2 (田代 1998 「市緊急報告書」14)  
20. 山ノ内字松岡 1337番6 (浜野 2007 「市緊急報告書」23)  
21. 山ノ内字松岡 1337番6 (浜野 2008 「市緊急報告書」24)  
22. 山ノ内字松岡 1337番1 (浜野 2008 「市緊急報告書」24)  
23. 山ノ内 1323番1、1338番2 (馬渕 2011 「23回市遺跡踏査・研究報告会発表要旨」)  
[長勝寺跡所在やぐら群] 24. 山ノ内 527番1 (かながわ考古学財団 2000 「長勝寺跡所在やぐら群」)  
25. 山ノ内 527番1 (かながわ考古学財団 1999 「長勝寺跡(No.88) 所在やぐら群」)  
[亀井岩跡] 26. 台字亀井 2018番外 (浜野 2002 「12回市遺跡踏査・研究報告会発表要旨」)  
[その他] 27. 28. やぐら  
29~38. 石切跡

6月23日条には「相模太郎（北条時宗）山内泉亭」とあり、將軍宗尊親王が遊宴や賦物などのために山内の時頼亭や時宗亭を何度も訪問していたことが記されている。弘安5年（1282）3月1日には、一遍が巨福路坂より鎌倉へ入ろうとしたが、たまたま太守北条時宗が当地に出御したために鎌倉に入れず、その夜は「やまとそば、みちのほとりにて念仏したまひける」とある<sup>3)</sup>。

山ノ内および近辺では嘉禎3年（1237）に常楽寺が建立され、建長5年（1253）11月25日に北条時頼が建長寺を建立し落慶供養を行っており、康元元年（1256）には最明寺も建立されていたようである。弘安5年（1282）には北条時宗が建長寺の西方に円覚寺を建立し、統いて弘安6年（1283）頃に淨智寺、弘安8年（1285）頃に東慶寺が建立されたと推定されている。そのほかに東慶寺前には国恩寺、円覚寺西側には正確寺、長勝寺などの寺院があったが廃寺となっている。13世紀後半より山ノ内の谷戸の南北両側の山腹には、得宗家屋敷や諸寺の塔頭が立ち並ぶ景観を呈するようになっていった。延慶3年（1310）1月14日の「建長寺直藏書下」<sup>4)</sup>の「建長寺門前地事、合廿四坪〈法円跡〉」「建長寺門前地事、合十二坪〈西得跡〉」などの記述から、この地が鎌倉の内に包含されていたと推定されている。

瓜ヶ谷については、正慶2年（1333）5月16日の道貞遺状に「山内瓜谷口屋地事」<sup>5)</sup>とあるのが初出とされ、それ以前については不明である。「円覚寺境内絵図」<sup>6)</sup>には南西端に山内街道に直交して南へ伸びる道が描かれ、「瓜谷路」と注記されている。交差地点には橋が2本描かれ、道の東側は西瓜川と思われる。その東は円覚寺門前の屋地で、多数の建物が密集して描かれる。道の西側にも建物が並んで描かれ、瓜谷路の入口両側は建物が建ち並び眼を向けていた様子がうかがわれる。寺域を示すと思われる朱線で囲まれた範囲の外側には南西端から東へと折れ曲がる筋が描かれている。その南に「薩摩掃部入道大夫跡」と「飯嶋孫次郎入道路」の文字がみられる。「飯嶋孫次郎入道」は詳細が不明である。「薩摩掃部入道大夫」は文保2年（1318）5月22日の「北条高時書下」で「山内地〈昭西堂跡〉」を安堵され



第2図 瓜ヶ谷周辺の歴史的環境 明治 15 年迅速図

た薩摩掃部大夫成綱と推定されている<sup>7</sup>。建武元年（1334）に奥州引付衆と奥州寺社奉行となり北畠親房とともに奥州に下ったようである。絵図の作成時期は建武年間（1334～1336）とされ、鎌倉時代末期の状況を描いていると考えられる。

暦応元年（1338）の「智真夢記」によると、陸奥国司北畠顯家が奥州からの上洛の際に鎌倉に立ち寄り、顯家の狼藉を恐れた円覚寺周辺の住民は被害を避けるために門前にある菜園の山を切り崩し、瓜谷から仮船坂への迂回路を設けようとしたという。しかし道が崩落し、僧智真の夢に円覚寺の守護神が現れ工事の中止を求められたので土を埋め戻したという<sup>8</sup>。

文安3（1446）年の「古教妙調證文」には目足寺（木足寺、目東寺）を名越花ヶ谷から円覚寺正統院領内瓜谷口山上の昭西堂跡に移したとある<sup>9</sup>。昭西堂は上述のように1318年には「跡」となっており、掃部入道大夫成綱の邸宅もその周間に存在したと考えられる。目足寺跡はおこり地蔵がある場所にあったという<sup>10</sup>。山中稲荷からその背後の尾根を東へ120mほど行くと尾根上から一段下がった平場があり、その北側の岩壁のやぐら状に穿たれた龕内に地蔵が安置されている。この平場は比較的広く、寺院や屋敷を建てるには適している。目足寺の「谷口山上」という記載や、絵図の「薩摩掃部入道大夫跡」も門前屋地背後の崖上に描かれていることから、昭西堂、成綱邸宅、目足寺はこの尾根上の平場にあったのはほぼ確実と考えられ、円覚寺境内絵図に描かれた筋は瓜谷路から分岐して尾根上にいたる枝道であろう。

ほかに観蓮寺という寺が存在したようである。「相模國風土記稿」に大船の多聞院に関して「觀蓮寺屋舗と唱る白田あり。当寺の持とす。觀蓮は蓋當寺の旧号にや」とあり、多聞院は永享の乱（1438～1439年）で衰退した觀蓮寺を甘精長俊が大船に移したもので、創建は天正7年（1579）とされる。觀蓮寺は東瓜ヶ谷にあったように受け取れるが、正確な位置は不明である<sup>11</sup>。多聞院はまた「晴明石」という境界目印の石を所有していたという。「晴明石」は県道にあったものを連駐軍が重機で掘り起こして移したといい、文化3年（1806）の「浦賀道見取絵図」にも描かれている<sup>12</sup>。現在は山内八雲神社に移設され、もう一つはJR横須賀線踏切から鳥森稲荷までの間に「安倍晴明大神碑」とともに安置されている。

「山之内円覚寺門前絵図」（慶安4年（1651）～貞享2年（1685）間）には「瓜谷」とのみ描かれており、その西にある道は「臺村道」と注記されている<sup>13</sup>。この道は光照寺へ登る道と推定される。「浦賀道見取絵図」には晴明石の隣に「字十王堂石橋」が描かれ、そこから伸びる野道が瓜谷路と思われる。

「相模國風土記稿」徳泉寺の項に「此他木東寺・觀蓮寺・宝境寺・東現寺・光陽院等の廃蹟あり、挙く陸田とす、各寺の事跡廃置の年次等今伝わらず」とある。東現寺は藤源治と読みが同じであると指摘されており<sup>14</sup>、藤源治の地にも寺院が建立されていた可能性もある。

瓜谷路一帯は、四角四境鬼氣祭が行われた地であり、晴明石や十王堂、圓覚寺境内絵図に描かれた「簷屋」などの存在から、鎌倉の西北の境界部と推定されている。圓覚寺門前の屋地は寺院に仕える承仕・小番に配分され、さらに豊職人などに貸し出されていた。その結果職人・商人が集まる門前町となり、江戸から明治にかけてもそうした数々の職人が軒を連ね、ある種特殊な雰囲気の町を形成していたのである。

### 第3節 瓜ヶ谷周辺の考古学調査（第1図）

谷の開口部では、縄文時代の落とし穴が台山遺跡（第1図14）で検出されている。続く弥生時代から奈良時代にかけては台山遺跡で多数の住居址が発見されている。こうした住居址はさらに西の台山遺

跡（第1図17）でも確認されており、台峯から県道を挟んで北側の鬼井岩跡（第1図26）でも弥生時代後半の住居址や7世紀頃の横穴墓が検出されている。瓜ヶ谷西側の尾根上にはこの時期にかなりの規模の集落が長期的に継続して展開していたことが推定される。

中世では、谷戸開口部東側では数か所発掘調査が行われており、おむね13世紀末から14世紀前半にかけて土丹や鎌倉石粒による地業面が確認され、溝や鎌倉石列、多数の柱穴や土坑が検出されている（第1図20～23）。建物が多数立ち、建て替えも頻繁であった状況が見受けられる。道路遺構は未検出だが溝の方向を見る限り現在の県道とは軸が一致していない。台山遺跡（第1図14）では、岩盤を掘削した中世の道路跡が見つかっており、尾根上の造成によって平坦部や通路を構築していたことが部分的に明らかになっている。西瓜ヶ谷遺跡（第1図11）は寺院跡の可能性も示唆されており、特に14世紀以降、谷戸の尾根上も開発され様々に利用されていたと考えられる。

谷戸の奥はやぐらが確認されている以外はほとんど調査例がない。やぐらは瓜ヶ谷奥の6つの小支谷にそれぞれ散在している。平成24年度の分布調査範囲外でもほかに2箇所のやぐらの存在を確認した（第1図27、28）。数自体は多くはないが、支谷が分岐する地点から最奥部までにわたってやぐらが造営されていることになる。本調査地点である西瓜ヶ谷やぐら群や最奥部の瓜ヶ谷やぐら群（第1図7）は、五輪塔をはじめ多種の浮き彫りをやぐらの玄室内外にほどこしており、鎌倉のやぐらの中でも極めて特徴的である。やぐらは14世紀から15世紀にかけて造成したと考えられる。

瓜ヶ谷やぐら群が存在する支谷をめぐる尾根上には茶毬址が確認され（第1図8～10）、およそ14世紀後半以降と推定される<sup>19</sup>。やぐら周辺の遺構の様相については判断材料がないものの、谷戸の奥は中世を通じて宗教的な場として機能していたと考えられよう。

## 註

- 1). 見上敬三 1986「鎌倉市文化財総合目録 地質・動物・植物篇」、鎌倉市教育委員会
- 2). 鎌倉市教育委員会 1996「仮設坂周辺詳細分布調査報告書」、鎌倉市教育委員会
- 3). 「一遍聖人絵伝」巻5
- 4). 鎌倉市教育委員会 1979「鎌倉市史 史料編第二」資料55、56、吉川弘文館
- 5). 鎌倉市教育委員会 1979「鎌倉市史 史料編第二」資料78、吉川弘文館
- 6). 三浦勝男編 1969「鎌倉国宝館図録 第15集 鎌倉の古絵図1」、鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館
- 7). 鎌倉市教育委員会 1979「鎌倉市史 史料編第二」資料62、吉川弘文館
- 8). 鎌倉市教育委員会 1979「鎌倉市史 史料編第二」資料112、吉川弘文館
- 9). 鎌倉市教育委員会 1979「鎌倉市史 史料編第三、第四」資料75、吉川弘文館
- 10). 鎌倉市教育委員会 1976「としよりのはなし」、194頁
- 11). 鎌倉市教育委員会 1976「としよりのはなし」、191頁
- 12). 児玉幸多監修 1977「浦賀道見取絵図」、東京美術
- 13). 三浦勝男編 1969「鎌倉国宝館図録 第16集 鎌倉の古絵図2」、鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館
- 14). 馬渕和雄 2006「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」22、鎌倉市教育委員会
- 15). 神奈川県教育委員会他 2001「古都鎌倉」を取り巻く山麓部の調査】

## 参考文献

- 「新編相模國風土記稿」（相武史料刊行会、1930年）  
鎌倉市教育委員会編 1959「鎌倉市史 総説編」、吉川弘文館  
鎌倉市教育委員会編 1959「鎌倉市史 社寺編」、吉川弘文館  
貫達人・川原武哉 1980「鎌倉廃寺事典」、横浜有隣堂  
松尾剛次 1993「中世都市鎌倉の風景」、吉川弘文館  
三浦勝男編 2005「鎌倉の地名由来辞典」東京堂出版

## 第3章 調査の成果

### 第1節 発掘調査の経過

平成27年度の調査は、平成25年度実施の調査に加え、やぐら上方の尾根にある塚状地形の確認、および垂直に近い形で岩盤が露頭している箇所の性格を確認することを目的とし、6箇所のトレンチ（第3図4～9）を設定して発掘を実施した。以下に調査の経過の概略を記す。

- 平成28年1月12日 現地への機材搬入を行う。国土座標点の確認。テント等の設営。
- 平成28年1月13日 調査地点の確認。現状の写真撮影および草刈りを行う。測量原点の移動。
- 平成28年1月14日 地形測量のため、調査範囲内にトラバースを設定。国有地範囲全城の地形測量を開始。
- 平成28年1月15日 尾根頂上部とやぐら東側にトレンチ4・5を設定し、発掘調査を開始。
- 平成28年1月27日 尾根北東側にトレンチ6を設定し、発掘を開始。
- 平成28年2月2日 尾根北東端にトレンチ7を設定し、発掘を開始。
- 平成28年2月9日 やぐら北側にトレンチ8・9を設定し、発掘調査を開始。
- 平成28年2月12日 トレンチの全測図作成。
- 平成28年2月22日 ドローンによる現場全体および各トレンチの空撮を実施。
- 平成28年2月23日 遺跡周辺の住民を対象に現地説明会を実施。神奈川県教育委員会文化遺産課埋蔵文化財グループによる現地の視察。
- 平成28年2月24日 各トレンチの写真撮影。
- 平成28年2月25日 各トレンチの埋め戻し。
- 平成28年2月29日 地形測量の終了。
- 平成28年3月1日 テントおよび機材を現場より撤収し、現地作業を終了。
- 平成28年9月8日 文化財課分室にて図面、遺物の整理作業を開始。

### 第2節 地形測量調査

平成25年度の調査の際には発掘調査を実施した尾根上の範囲での地形測量を行っている。しかし、発掘範囲以外は地形の変換線を計測するにとどまっており、尾根の先端部全体については十分な地形データを取得するに至っていない。そのため、本調査においては、トレンチによる発掘調査と並行して、国有地となっている範囲については可能な限りの地形測量を行うことにした。

計測はトータルステーションを用い、平面直角系座標によるXY座標と標高をおよそ40～50cm間隔でランダムに記録し、調査の終了後にGISソフトウェアを用いて処理を行ったのち等高線を抽出するという手法を用いた。地形の細かな変化を記録するために、単純な等間隔ではなく地形の変換点を重視して計測を行った。

計測範囲は約3540m<sup>2</sup>で、41368点を計測した。等高線抽出の際に計測エラーと考えられる調点については除去している。なお周囲の民家に近い箇所や、草木の伐採を行っておらず見通しが効かない地点については計測を実施していない。さらに急斜面は十分にデータを取得できていない箇所もある。

処理後の結果は第3図となる。等高線は地形の変化を明示するため10cm間隔（太線は50cm間隔）



第3図 平成27年度調査地点全体図

とした。平成 25 年度の調査でこの尾根にはやぐら、塚状遺構、平場、石切跡と考えられる崖面、道路などが報告されている。今回の測量結果と測量時の観察所見、遺跡の発掘成果を加えて、再度その構造と位置関係を整理した（第 4 図）。それぞれの所見は以下の通りである。

#### （1）塚状地形

北東に伸びる尾根の最高地点にあり、標高 58 m 付近より円錐形の高まりとなる。最高地点の標高は 58.75 m である。北東方向にやや伸びる卵型であり、長径 7 m、短径 5 m の規模となる。表面には区画などは確認できていない。その形状から人工的な構造物ではないかと想定されていたが、後述の通り今回トレンチ 4 を設定し調査を行った結果自然地形と判断されたため、遺構ではなく偶然塚のような形状になっただけと考えられる。

#### （2）平場

平成 25 年度報告書では、尾根上に階段状に連続する平場、やぐら前庭部に該当する平場、そのほか丘陵中腹および裾部に 3箇所の平場が存在するとしている。今回の調査で平坦に近い箇所に便宜上番号を振った。またそのほかの平場とおぼしき箇所も範囲を示してある（第 4 図）。

尾根上に階段状に連続する平場は平場 1～3 で、4 も連続するものと考えられる。尾根上 1段目の平場（平場 1）は平成 25 年度のトレンチ 2 の発掘の結果、階段状に二段になっており、周縁より中央が段状に高くなっている。2段目の平場（平場 2）は幅 5m、長さ 12m の範囲ではほぼ平らになっている。トレンチ 1 内の北側では岩盤に加工痕らしき痕跡が確認されており、平場 1 と 2 は人工的に造成された可能性がある。トレンチ 2 からトレンチ 4 にかけてはやや急な傾斜となって岩盤がつながっているが、人工的な加工痕跡は認められなかった。

3段目の平場（平場 3）は 1段目および 2段目の平場の東南側に腰曲輪状に形成されている。平場 3 の最南端部では表土が一部崩落し岩盤が確認できた。観察の限りでは岩盤は完全に垂直ではなく、人工的な加工痕なども明瞭ではなかった。北側はやぐら上に底辺約 10 m、高さ 6 m のゆるやかな平場が形成されている。

平場 4 は平場 3 の北東部で幅、長さともに 4 m の範囲である。ゆるやかな傾斜で下がっている。

平場 5 は 1 号、2～5 号やぐらの前庭部にあたる場所で、幅 4～5 m の平場となっている。2号から 5号やぐらの前面は、トレンチ 3 の調査でやぐらの前面すぐから東に向かって緩やかな岩盤面のスロープが下がっていくことが確認された。スロープ上には 1m 近く土が堆積して現状となっている。1号やぐら東側の平坦面はトレンチ 5 の発掘結果から推定すると、石切によって階段状になっている可能性がある。

尾根北側では平成 25 年度調査では丘陵中腹に平場を見出している。本調査時では倒木などが積み重なりやや不明瞭な状況ではあったが、傾斜がややきつくそれほど平坦でもないため、この箇所は自然地形の可能性が高いと考えられる。また丘陵中腹から裾部にかけても切通状通路に連なる平場があるが、ここも本調査時では倒木が集積されていたため、地面の状況がほとんど確認できなかった。

丘陵の北東の裾には川に沿った平場 6 がある。川との比高は約 2m で東西に細長く伸び、東側は約 7m 以上の幅を有するが、西側は全体に狭く幅は 1m 程である。本調査でのトレンチ 6 の成果では、少なくとも東側については石切跡が埋まった結果現状の平場になったと考えられる。平場 6 の東側は段状に落ち込んだ先にやや平坦な面が広がっており、ここも平場である可能性が高い。

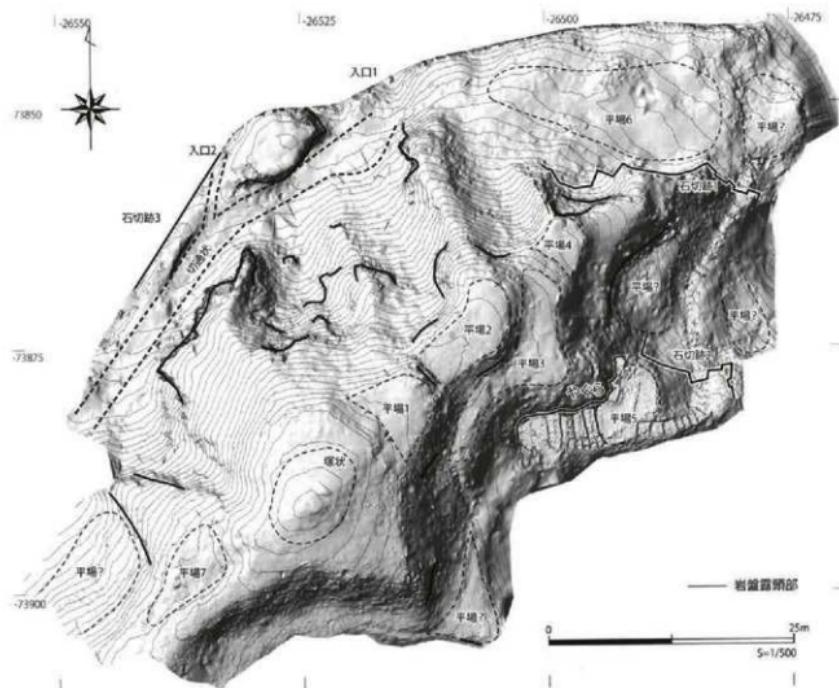
平場7は塚状地形の南西で、尾根が狭くなり土壠状を呈する北側にあたる。長さ10m、幅5mほどで尾根の頂上から段となって落ち込む。

その他にも平場5の北と東、平場7の西などもやや傾斜するが平場と推定される地形が何箇所か存在している。トレンチ調査の結果から土の堆積はかなりの厚さになっており、視認される現況と岩盤の形状は箇所によってはかなり乖離していると思われる。

### (3) 石切跡

尾根の北側と南側では地形の様相が異なり、北側は南北方向にいくつかの小支谷が形成されている。平成25年度の調査において、小支谷の崖面を人工的に切り落とした切岸とし、西から東へ5箇所の切岸を推定している。本調査時における地表面の観察とトレンチの調査より岩盤の露頭部を確認したが、ノミ痕などが確認された地点は比較的少なかった。風化によってそうした痕跡が消失してしまった可能性もあるが、小支谷を人工的に形成したものと積極的に判断できる根拠が不足しており、第1～3切岸と推定された箇所は自然地形であると考えておきたい。

平成25年度の調査では北側斜面を第4切岸、尾根北東端を第5切岸としているが、岩盤露頭面に多数のノミ痕や矩形に切り出した痕跡が認められ、さらにトレンチ6、7の調査結果からいずれも石材を



第4図 尾根の地形

切り出した箇所と判明した。両者はおよそ一連のものであると考えられる（石切跡1）。

平場5の東部でも岩盤露頭にノミ痕が現存しており、トレーナー5の発掘の結果を踏まえるとやぐらの北まで連続してL字状に壁面を切り出した石の掘削跡である（石切跡2）。

また北西部の谷川に落ち込む断崖面にも工具痕が残っている（石切跡3）。この工具痕はやや明瞭かつ長さが他の石切痕よりも長いように見受けられ、他よりも時期的に新しい可能性がある。

#### (4) 切通状遺構

塚状地形の北西には尾根の側面を切り崩して切通状になった箇所が残存している。この切通状遺構は南西方向に山裾に沿って上っていく。その幅は現状では約2m、総延長は50mほどである。通路は北の谷川に向けて傾斜しながらゆるやかに降りているようであり、川の南岸側壁に掘り込み状の落ち込みがみられ、ここが切通状遺構の北端かと推定される（入口1）。これとは別にそこから約12m西には北側壁を約2mの幅で岩盤を階段状に削り取った箇所がある（入口2）。

切通の中央南側は高さ約8mの岩盤の露頭した断崖となっている。その北側は削平されたのか幅約1.5mの狭い平坦面となっていて遺構との比高はわずかであるが、入口2の東側には側壁が残存している。高さ約3mでほぼ垂直であり、上面は2段の平坦面になっている。比高は0.3～0.5mで、下段の規模は長径約8m、短径約5m、上段は長径約3.5m、短径2mである。

上述のように谷川の側壁には石切痕がみられ、川の断崖面にこうした工具痕が確認できるのは現状では切通状遺構の側面だけである。

切通状遺構は通路状になってはいるものの、今回も発掘を行ったわけではないので正確な構造や構築時期などについては判断する資料に欠ける。中世にまでさかのほるものかどうかは今後の検証が必要である。

### 第3節 トレンチ調査

平成25年度に尾根上に2か所（トレンチ1、2）と、やぐら2～5の前庭部（トレンチ3）の確認調査が行われている。本調査はそれに継続するものであるため、トレンチの番号についても、平成25年度調査に続く形でナンバリングを行った。それぞれの位置関係については第3図を参照されたい。

#### (1) トレンチ4

やぐら群より西の上方の尾根の最高部は塚状遺構と認識されていた。この地形が人工的に構築されたものかどうかを確認するため、その中心を通るように北東から南西方向に20×2mのトレンチを設定し発掘を行った。塚状地形の北西部は民有地であるが、地権者の協力を得て最高地点の中心部のみを一部拡張して発掘を行った。トレンチの北端は平成25年度トレンチ2の南端に一部重複している（第5図）。

腐植土を20～30cm取り除くと砂質土が10～20cm堆積しており、その下は風化した砂岩層である。風化砂岩層を約10cm掘り下げるに、凝灰質砂岩の岩盤が検出された。頂上部においては砂質土、風化砂岩層はほとんどみられず、腐植土の直下で岩盤面が検出された。

頂上付近はやや平坦である。岩盤は木の根などの攪乱で表層はかなり凹凸がある。頂上部付近ではほぼ東西方向に併行して並ぶ岩塊が2条みられ人工的な構造物かとも思われたが、観察の結果岩盤の不整合面によるもので人工的なものではないと考えられる。

頂上部から北側へ4mほど、南へは3mほどでやや傾斜がきつくなる。岩盤表面や土の堆積状況から、人工的な岩盤面の形成や盛土などの明確な痕跡は確認できず、この地形は自然に形成されたものであり、砂質土は風化した砂岩と腐植土の混入したものと考えらえる。

頂上の中心部は地境を示すコンクリート杭が打たれているため、その保護のために発掘を行っていないが、周囲の状況からしても未発掘部分に人工的な穴などが構築されている可能性は低い。したがってこの円錐状の地形は、自然地形が偶然に塚のような形をとっているものであると結論づけた。

トレンチ4の範囲からは遺物は検出されていない。

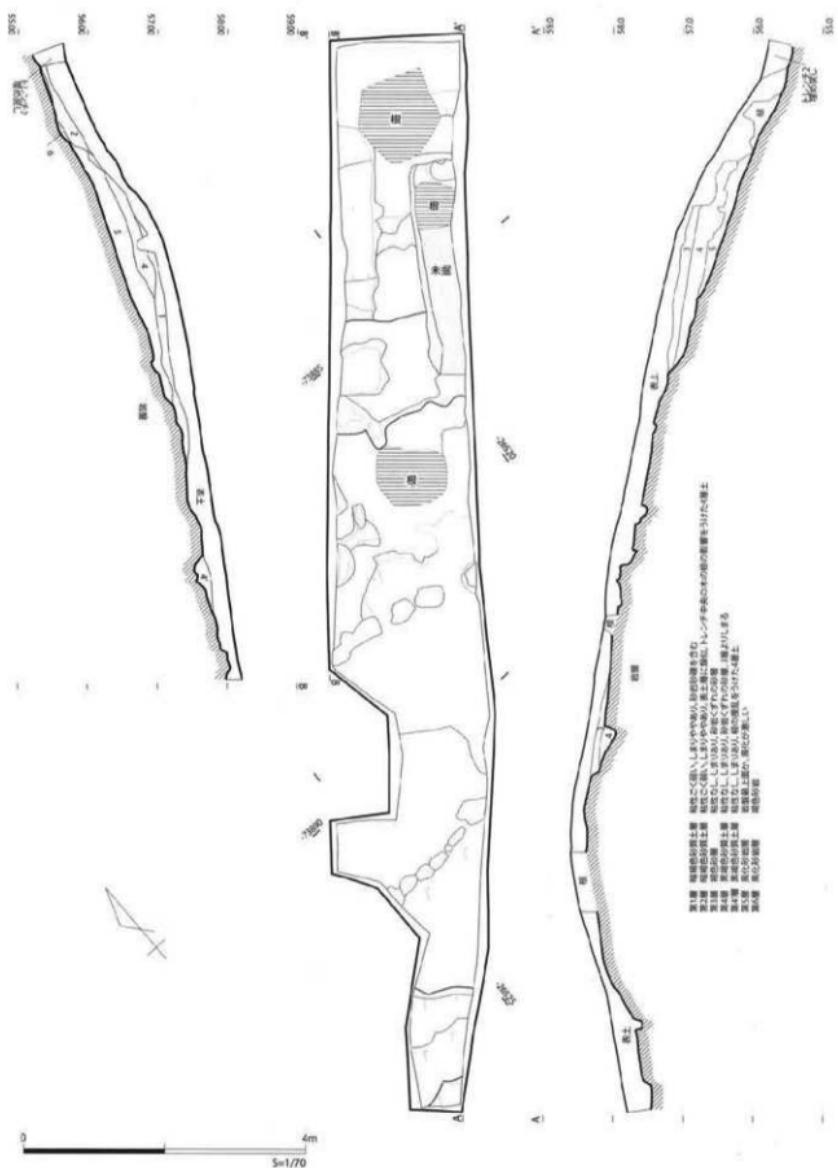
#### (2) トレンチ5、8、9

1号やぐらの前はやや広い平場となっており、北、東は急激に落ち込む地形となっている。特に北側の斜面ではわずかだが岩盤が露頭している箇所があり、人工的な改変がなされていると推定された。そこで露頭部分から4×2mの範囲で調査区を設定し、トレンチ5とした。

トレンチ5を発掘した段階で、石切の跡であることが判明した。その西側も一部岩盤が露頭していたため、西側に1.5×1mほど拡張し、トレンチ8とした。さらにそこからやぐらまでの状況を確認するため、1号やぐらの北側からトレンチ8にいたるまで3×1mの規模であらたに調査区を設定し、トレンチ9とした（第6図）。

トレンチ9からトレンチ8までは腐植土直下に凝灰質砂岩の岩盤面が検出された。腐植土の堆積の厚さは10cm前後である。岩盤面はゆるやかな斜面となっており、トレンチ8では段差があるが人工的な加工痕などは見いだせず自然地形と考えらえる（第9図）。ごく一部の範囲なので断定はしがたいが、1号やぐらの北側にやぐらが構築されている可能性は低い。

トレンチ5はその範囲内のはば全体で明瞭な工具痕が確認された。腐食土は南壁側の厚いところでは50cmほど堆積している。その下に砂質土がさらに50～60cmほど堆積し、岩盤面の上には砂岩が崩落



第5図 トレンチ4

したことによる砂層が10cmほどみられる。切り出した際に廃棄されたと思われるやや大型の砂岩塊が下方に少數混入していた（第8図）。

地形的には北に向かって傾斜して低くなり、調査前の比高は約2mである。その斜面から石を切り出している。垂直に切り立った岩盤壁面には工具痕が明瞭に残っており、床面にも加工痕がみられ、一部は溝状になっている。クサビ痕かと思われる痕跡が一部にみられるが、明瞭な形では確認できなかった。壁面に残る工具痕はやや短く、ノミ状工具を使用したと考えられる。

石を切り出した結果段ができるまで、東西方向に5段、南北方向に3段である（第7図、第10図）。中央付近は傾斜のややゆるやかな階段状になっており、低い方から先に石を切り出し、高い方から低い方へと石塊を滑らせて落としていくという手順によって切り出した結果と考えられる。北東隅の落ち込みは穴状に掘りこんだ遺構のようにも見えたが、石を切り出した結果急激に深く落ち込んでいるだけと考えられる。この落ち込みの中には比較的大型の砂岩塊がいくつか残された状態で、砂岩塊には加工痕が明瞭に認識された。落ち込み内はトレーナーの東壁際でさらに段差となって落ち込んでいる。

岩盤上の痕跡から判断すると、最低14点の石の切り出し範囲が確認できる（第6図）。切り出された石にさほど統一した規格性はなく、形態も長方形が基本であるが、正方形に近いものもあるようである。ただし長辺100cmを超えることはほとんどない。厚さもやや変異幅があるようであり、かならずしも痕跡が明瞭ではない場合もあるが、30～50cmほどの厚みで切り出しているようである。

岩盤面には石切の際の工具痕のほかには遺構らしき掘りこみなどは確認できなかった。したがって、石の切り出しが終了したあとは特に使用されることなく、風化した砂や腐植土によって次第に埋没していったのである。上層で近代の遺物がまとめて出土しているが、上からの投げ込みのような形であると考えられる。その後、完全に埋没してしまったのである。

#### 出土遺物

トレーナー8と9からは遺物は出土していない。トレーナー5では5層以上より磁器を中心とした遺物が出土している（第11図）。遺構などに伴うものではない。トレーナー内一括と上層出土として取り上げた中で同一個体と考えられるものもあるのでまとめて取り扱う。

1～8、10～12は大型の碗である。3は丸碗、それ以外は平碗である。1、2は銅版転写、7はゴム印、8もゴム印の上に手描きで模様を描く。10は吹き墨で、3～5は手描きにより絵付けがされている。6、9、11、12は無文である。3と4はおそらく同一個体と思われる。

13は小ぶりの碗で金泥により模様が描かれる。14はクロム青磁の小型碗。15～17は高台から脇部にむけて鋸角に立ち上がる小碗。17の高台内には銘が手書きで入るが判読できない。18は小破片のため不明だが向付の類か。19は皿であろう。

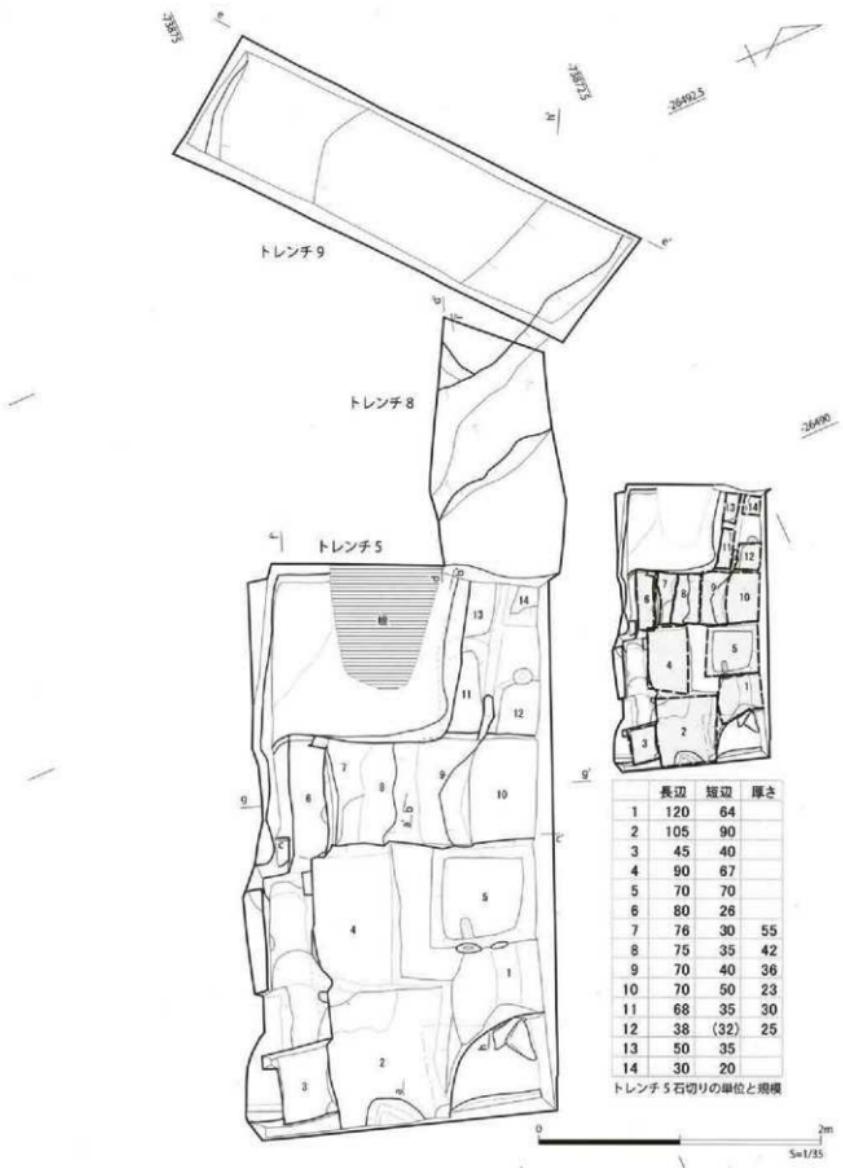
20、21、22は徳利で、20、21はおそらく同一個体である。20には鉄軸で屋号が描かれる。23は小型の壺類か。24は急須の把手で萬古焼と思われる。25、26は薄手の焙烙か。同一個体と推定される。

27は砥石の類と考えられる。28は鉄製のクサビか。

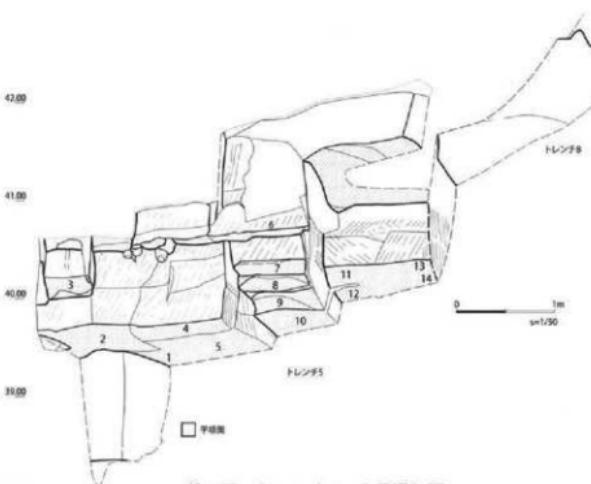
磁器は銅版転写、ゴム印、吹き墨と手描きのものが混在している。技法や文様から基本的に19世紀末～20世紀前半頃に推定できる。岩盤面直上では近代の遺物は出土していないため、5層より下は近代以前に埋没していたと考えられる。

トレーナー5の下層からは中世のかわらけ片が出土しているが、小破片のみであり図示していない。

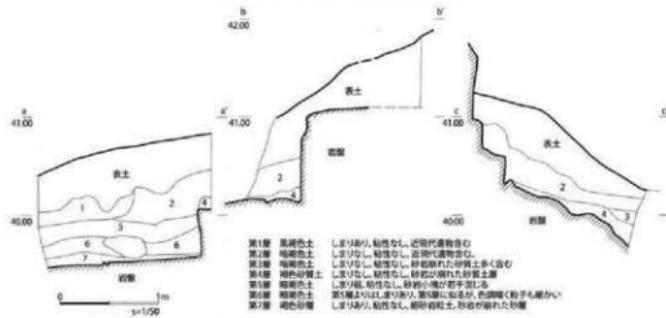
北東隅の落ち込みに残されていた加工痕のある切石を3点のみ規模の計測を行った。いずれも明瞭な



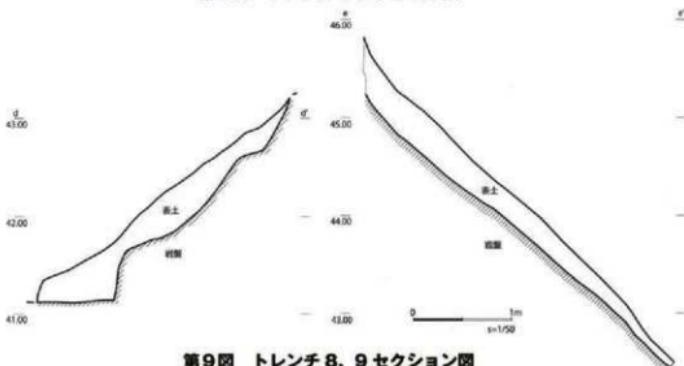
第6図 トレンチ 5、8、9 平面図



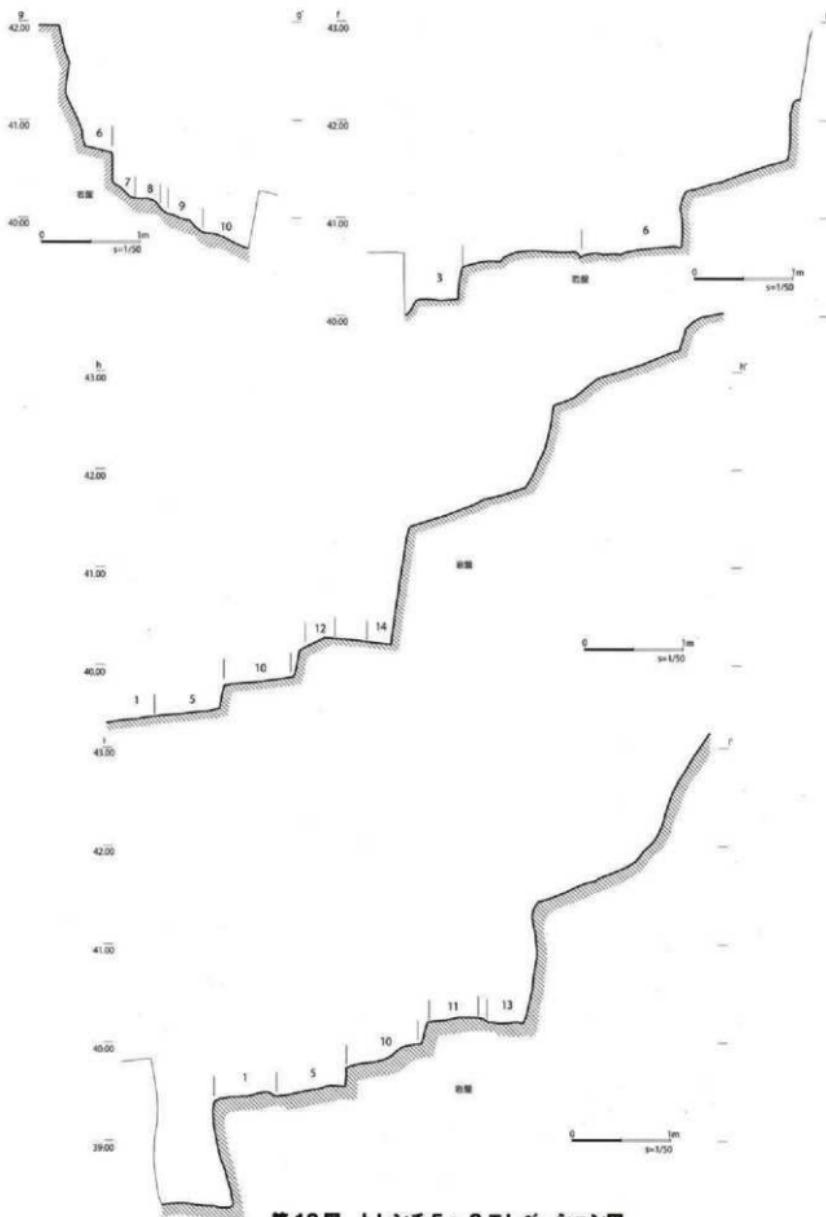
第7図 トレンチ5、8見通し図



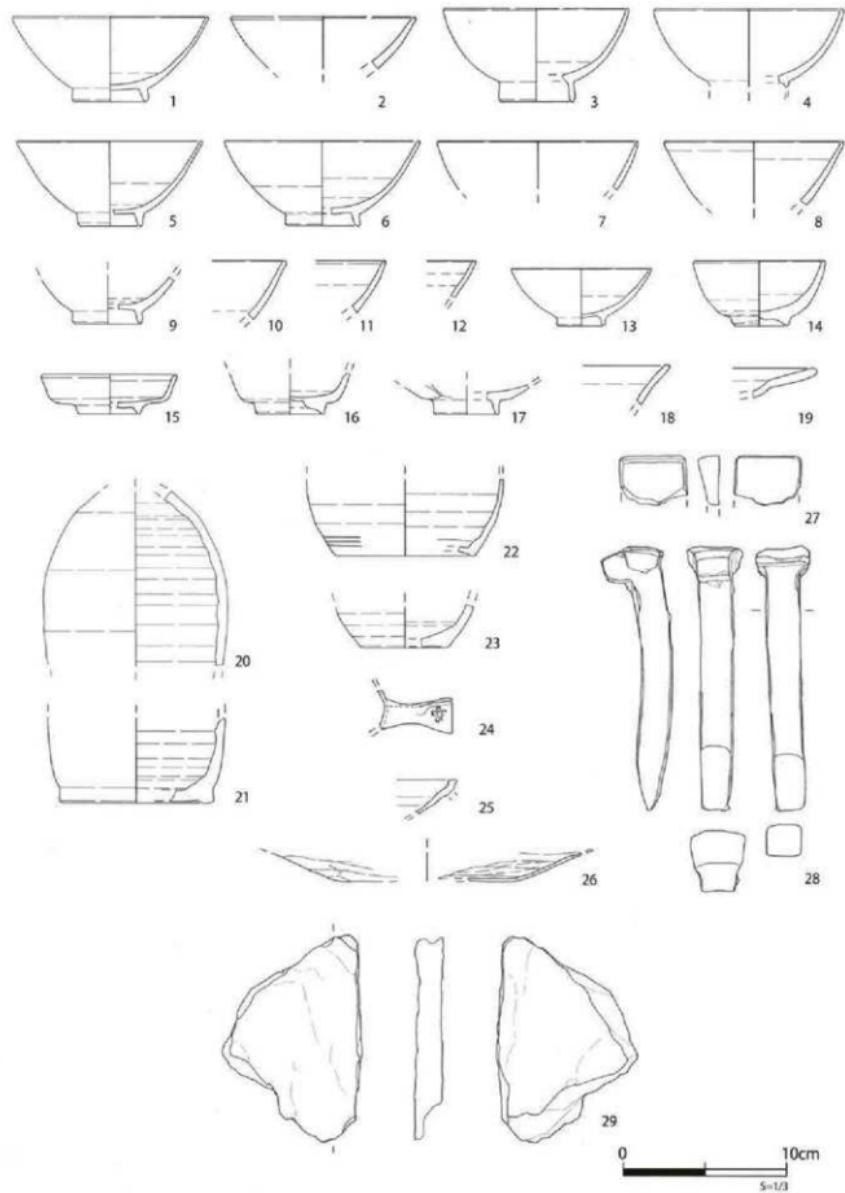
第8図 トレンチ 5 セクション図



第9図 トレンチ8、9セクション図



第10図 トレンチ5～8エレベーション図



第11図 トレンチ5出土遺物

表1 レンチ5出土遺物観察表

( ) = 復元値 [ ] = 遺存値

指 番 号	出土遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
11-1	レンチ5 上層	碗	約1/5残存	[12.0]	[4.4]	5.2	a: 成形・整形 b: 廉土・赤地・材質 c: 色調 d: 輪調 e: 既成土備考 b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 刷版転写、コバルトにより草花文を描く
11-2	レンチ5 一括	碗	口縁部小片	[11.4]	-	[3.15]	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 刷版転写、鶴・松・波・岩をコバルト、雲を茶色で描く
11-3	"	碗	約1/5残存	[11.4]	[4.4]	5.7	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 刷版転写、鶴・松・波・岩をコバルト、雲を茶色で描く
11-4	レンチ5 上層	碗	口縁部小片	[11.6]	-	[4.8]	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 刷版転写、外面コバルトで輪文、間に円闕十字文。11-3と同一個体と思われる
11-5	レンチ5 一括	碗	約1/3残存	[11.4]	[3.7]	5.2	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 青緑色で多条の曲線を描く
11-6	"	白磁 無文鏡	約1/4残存	[12.0]	[4.4]	5.2	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好
11-7	レンチ5 上層	碗	口縁部小片	[12.3]	-	[3.0]	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 外面ゴム印、手書き併用による草花文
11-8	レンチ5 一括	碗	口縁部小片	[11.0]	-	[3.8]	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 外面ゴム印、手書き併用による草花文
11-9	"	碗	底部約1/2残存	-	[4.0]	[2.9]	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 外面ゴム印、手書き併用による草花文
11-10	"	碗	口縁部小片	-	-	[3.6]	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 外面青、墨の吹き墨による富士山
11-11	"	碗	口縁部小片	-	-	[3.1]	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好
11-12	レンチ5 上層	碗	口縁部小片	[2.2]	-	[2.2]	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好
11-13	レンチ5 一括	碗	約1/2残存	[8.6]	2.6	3.5	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 外面金泥により松を描く
11-14	"	小型厚手 碗	完形品	8.1	3.2	3.9	b: 白色 精良堅緻 d: クロム青磁 e: 良好 f: 飛び跑
11-15	レンチ5 上層	腰折皿?	約1/2残存	[8.2]	[3.6]	2.4	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 外面口縁付近にコバルトによる圓線1条、内面同心円状の網目
11-16	"	半筒形碗?	底部の約1/2残存	-	[4.0]	[2.5]	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 外面刷版転写で梅の枝?
11-17	"	碗?	底部の約1/4残存	-	[4.0]	[1.8]	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 高台見込みに鉢あり
11-18	"	向付?	口縁部小片	[10.6]	-	[2.4]	b: 白色 精良堅緻 d: 透明釉 e: 良好 f: 内面口縁部縁どり、その下に格子模様
11-19	レンチ5 一括	皿類	口縁部小片	-	-	[1.8]	b: 乳白色 精良堅緻 d: 透明釉、貫入り e: 良好
11-20	レンチ5 上層	蝶利	胴部片	-	-	[10.7]	b: 黃砂 c: 黄灰色 d: 灰釉 e: 良好 f: 鉄釉で「巴」のような屋号を描く
11-21	レンチ5 一括	蝶利	底部片	-	[9.0]	[5.2]	a: ロクロ成形 b: 黃砂 c: 黄灰色 d: 灰釉 e: 良好 f: 11-20と同一個体か
11-22	レンチ5 上層	蝶利	底面の約1/6残存	-	[8.4]	[4.7]	b: 白色 精良堅緻 d: 白色 e: 良好
11-23	"	小盤	底面の約1/6残存	-	[8.4]	2.65	a: 褐付部分にヘラ削り痕 b: 黄砂 精良 d(内側)赤褐色、(外側)暗赤褐色 e: 良好 f: 施地不明
11-24	レンチ5 一括	急須	把手のみ残存	残長 [4.5]	残幅 [2.45]	厚さ 0.35~0.2	b: 精良堅緻 c: 赤褐色 e: 良好 f: 把手に板を彫り込み。周古茎
11-25	レンチ5 上層	培培?	口縁部小片	-	-	[2.2]	f: 11-25と同一個体と思われる
11-26	レンチ5 一括	培培?	底部片か?	-	[11.0]	[1.9]	a: 外面: 培面直をヘラで消す、内面: 培面による成形・整形痕をヘラで鍛で消す。 b: 黄砂・長石粒 良土 c: 淡黄褐色 e: 良好 f: 外面に媒材付着
11-27	レンチ5 上層	砥石		[3.0]	[4.0]	[1.75~0.75]	e: 面面使用痕有り
11-28	レンチ5 一括	櫛	完形品	長 16.1	幅 20.1	厚 1.9	

表2 レンチ5付近採集遺物観察表

( ) = 復元値 [ ] = 遺存値

指 番 号	出土遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
11-29	レンチ5 外上方	板碑	小破片	長 [12.1]	幅 [8.6]	厚 1.6	縞片岩製。本来の大きさ不明。表面とも風化激しい。露母を多量に含む。

工具痕がみられ、長方体であるが完全な状態ではなく、切り出しに失敗して放置したものと思われる。

1. 最大長 30cm × 最大幅 20cm × 最大厚 20cm
2. 最大長 26cm × 最大幅 25cm × 最大厚 13cm
3. 最大長 40cm × 最大幅 27cm × 最大厚 20cm

なおトレンチ内ではないが、トレンチ 5 の南側上方すぐ傍で板碑の破片が採集された（第 11 図 29）。薄い板状の縁泥片岩の破片であり、板碑が破損したものである。埼玉県秩父地方産の量産品と推定される。時期はおよそ南北朝～室町時代である。平成 17 年度の 1 号やぐら内の玄室を発掘した際に検出した方形土坑からも縁泥片岩の板碑片が出土している。この板碑片も 1 号やぐら内に安置されていた板碑の可能性がある。

### (3) トレンチ 6

尾根先端部の北面は高さ約 3m のオーバーハング気味に切り立った崖面になっており、岩盤が露出している状況であった。そこから北に向けてやや広い平場となっており（平場 6）、ここにもやぐらなどの人工的な構造物があるかどうか確認することになった。崖面に接する形で 4 × 3m のトレンチを設定してトレンチ 6 とし、発掘調査を行った（第 12 図）。

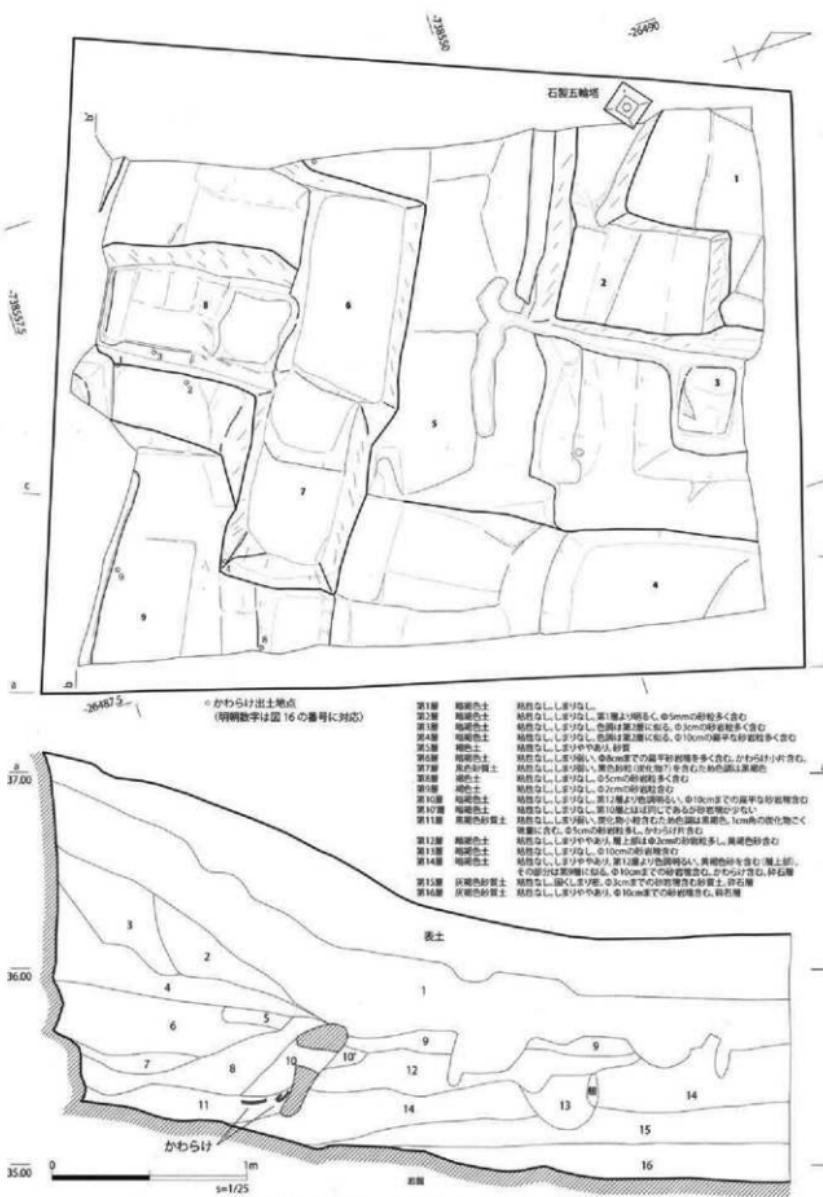
20 ~ 30cm ほど腐植土が堆積しており、その下には細砂粒の混在した腐植土が 10 ~ 20cm の厚さで見られる。そして現地表より 60cm ほど下、海拔 35.6m のあたりで、ほぼ平坦に 5cm 大の砂岩塊の堆積がみられる。現地表から 1.2 ~ 1.3m 挖り下げると岩盤面に達する。岩盤面上には 5 ~ 10cm 大の砂岩塊が 20cm ほどの厚さで高い密度で堆積していた（第 12 図）。

岩盤面は壁面にも平坦面にもすべて工具による加工痕がみられる。下部はほぼ垂直に切り出されているが、壁は完全に平らではなく凹凸がみられ、トレンチの隅は東西いずれも奥に掘りこまれており、ちょうどトレンチの部分だけ北側に少し突出した状態となっている。平面的には北側に向かってゆるい傾斜で下がっていくが、トレンチ中央付近は方形の土坑状に掘り下げられ、北西隅は階段状の高まりとなっているなど、単純に下がっていくわけではない（第 15 図）。当初はやぐら、あるいは部屋状の構造物ではないかと思われたが、加工痕の状況や石の残り具合からみて石切場と推定される。

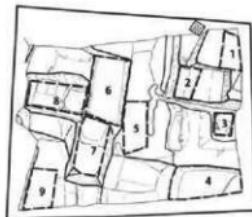
工具痕や段差の状況からみると、長方形の石材を矩形に切り出しているようである。トレンチ 5 と同様に工具痕はさほど長くなく、ノミ状工具を使用していると考えられる。平面上にはさほど明瞭な痕跡はみられない。最低 9 個の切り出し痕が確認でき、切り出した形状、大きさには厳密な規格性はなさそうであるが、それでも長辺 80 ~ 90cm、短辺 40 ~ 50cm 程度となり、崖面の工具痕からみると厚さは 25 ~ 30cm で、30cm 程度が多いようである。岩盤上に堆積していた砂岩塊は石を切り出した際に出る碎石と考えられる。

トレンチの南側崖面のそばでは、第 14 層の砂岩塊堆積の上と、岩盤面より 20cm ほど上の砂岩塊混じりの砂層内から、かわらけが少數だがまとまって発見された（第 12 図、第 13 図）。下層のかわらけは出土状態から、石切時かそれよりさほど時をおかずして廃棄されたものと考えられる。

北側の低い方から石を切り出していく、最終的に崖面の石を切り出すという手順が想定される。崖面を切り崩してある程度規格性の高い石を切り出し、石を切り出した際に出た石屑はそのまま北側の低い方に放置されたとのであろう。かわらけの多くは第 6 層以上から出土しており、6 層以上ではほとんど砂岩塊が見られないことから、石切を終了したのちに平坦面を作り、何らかの利用がなされた可能性もあるが、やがて放置され風化した砂岩粒や腐食土によって次第に埋没していったと考えられる。調査前

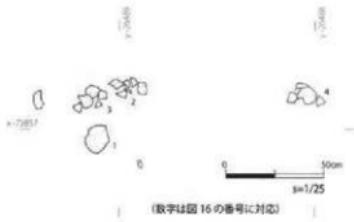


第12図 トレンチ6平面・セクション図

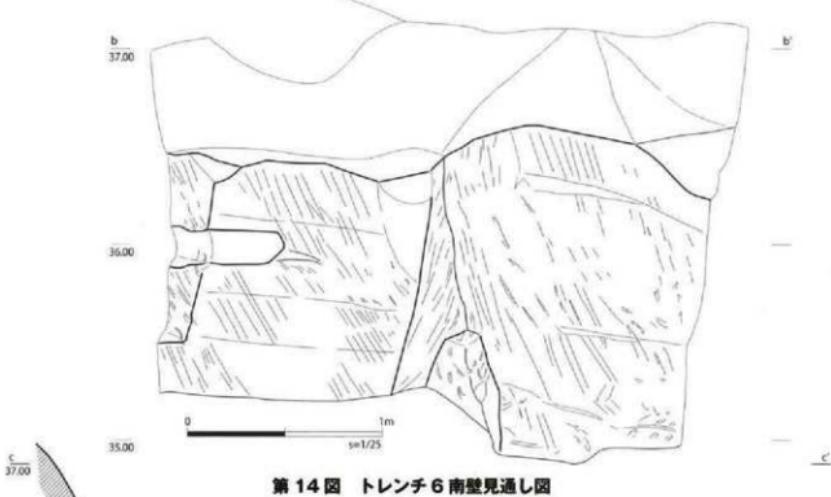


	長辺	短辺	厚さ
1	70		
2	50	30	
3	40	35	
4	(80)	(50)	(8)
5	90	50	
6	90	50	20
7	90	50	26
8	100	45	13
9	40	30	

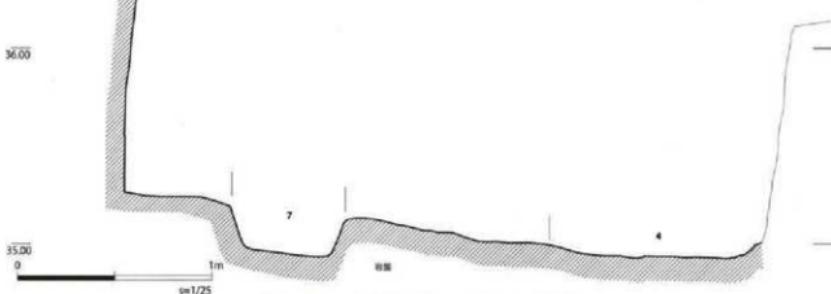
トレンチ 6 石切りの単位と規模



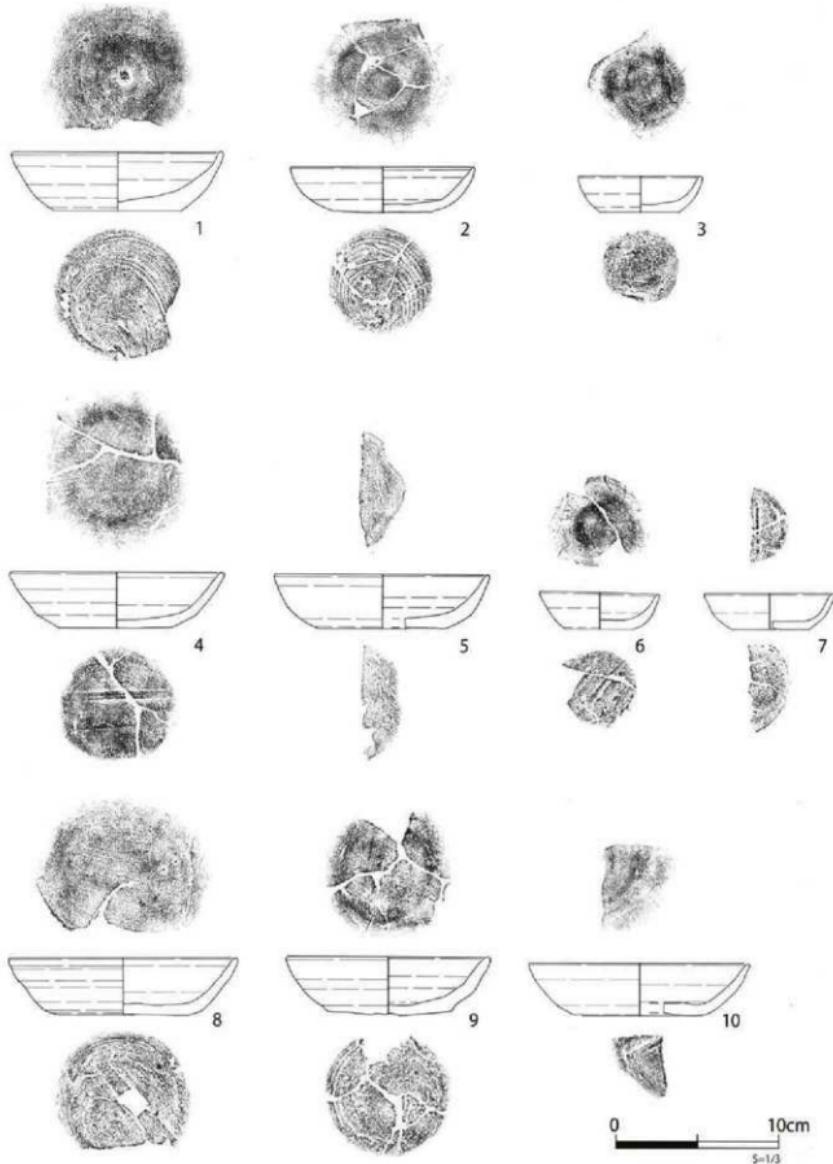
第 13 図 トレンチ 6 中層かわらけ出土状態



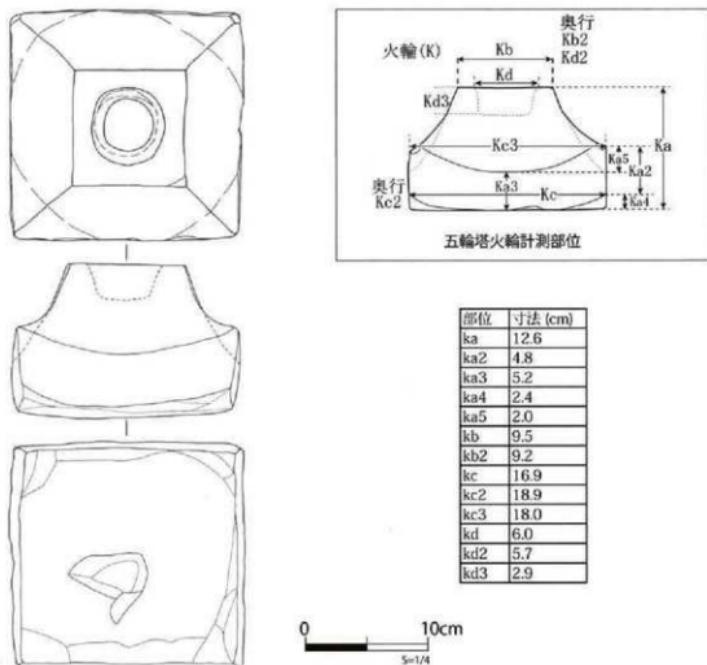
第 14 図 トレンチ 6 南壁見通し図



第 15 図 トレンチ 6 エレベーション図



第16図 トレンチ6出土遺物



第17図 トレンチ6出土五輪塔

表3 トレンチ6出土遺物観察表

( ) = 復元値 [ ] = 遺存値

指図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
16-1	トレンチ6 西側6層	かわらけ	約2/3残存	12.8	7.8	3.6	x 口形・整形 bx 土・素地・材質 c 色調 d 釉面 e 烧成 f 程度 x ロクロ 外底系切・底面部へ調整窓有 内底ナデ 摩耗が激しく不明瞭 y 黄砂・海綿骨芯・青母・赤色粒・白色粒・泥岩粒 c 黄褐色 e 良好 z 内底中に粘土系の板跡
16-2	〃	かわらけ	約3/4残存	11.2	5.9	2.8 ~ 2.7	x ロクロ 外底系切・板状圧痕 内底ナデ(横方向の指頭ナデ) b 黄砂・ y 海綿骨芯・赤色粒・白色粒・泥岩粒 やや粗土 c 黄褐色 e 良好
16-3	〃	かわらけ	約3/4残存	7.4	4.8	2.2	x ロクロ 外底系切・板状圧痕 内底ナデ(横方向の指頭ナデ) b 黄砂・ y 海綿骨芯・赤色粒・泥岩粒 やや粗土 c 黄褐色 e 良好
16-4	トレンチ6 東側6層	かわらけ	約3/4残存	12.8	6.8	3.4	x ロクロ 外底系切・板状圧痕 内底ナデ(横方向の指頭ナデ) b 黄砂・ y 海綿骨芯・赤色粒・泥岩粒 やや良土 c 淡褐色 e 良好
16-5	〃	かわらけ	約1/5残存	13.0	7.6	3.3	x ロクロ 外底系切 内底ナデ(横方向の指頭ナデ) b 黄砂・ y 海綿骨芯・赤色粒・泥岩粒 やや粗土 c 淡褐色 e 良好 x ロクロ 外底系切・板状圧痕 内底ナデ(横方向の指頭ナデ) b 黄砂・ y 海綿骨芯・赤色粒・泥岩粒 やや粗土 c 淡褐色 e 良好
16-6	〃	かわらけ	約2/3残存	7.25	4.0	2.3 ~ 2.2	x ロクロ 外底系切・板状圧痕 内底ナデ(横方向の指頭ナデ) b 黄砂・ y 海綿骨芯・赤色粒・泥岩粒 やや粗土 c 淡褐色 e 良好 x ロクロ 外底系切・板状圧痕 内底ナデ(横方向の指頭ナデ) b 黄砂・ y 海綿骨芯・赤色粒・泥岩粒 やや粗土 c 淡褐色 e 良好
16-7	〃	かわらけ	約1/4残存	8.0	4.7	2.2	x ロクロ 外底系切・板状圧痕 内底ナデ(横方向の指頭ナデ) b 黄砂・ y 海綿骨芯・赤色粒・泥岩粒 やや粗土 c 淡褐色 e 良好 e 上口縁に一部剥離有
16-7	トレンチ6 東側11層中	かわらけ	約2/3残存	(14.0)	8.5 ~ 8.0	3.6	x ロクロ 外底系切・板状圧痕 内底ナデ(横方向の指頭ナデ) b 黄砂・ y 海綿骨芯・赤色粒・泥岩粒 やや粗土 c 淡褐色 e 良好
16-9	トレンチ6 一括	かわらけ	約3/4残存	12.1	7.6	3.6	x ロクロ 外底系切・板状圧痕 内底ナデ(横方向の指頭ナデ) b 黄砂・ y 海綿骨芯・赤色粒・泥岩粒 やや粗土 c 淡褐色 e 良好
16-10	〃	かわらけ	約1/4残存	13.4	6.8	3.2	x ロクロ 外底系切・板状圧痕 内底ナデ(横方向の指頭ナデ) b 黄砂・ y 海綿骨芯・白色粒・泥岩粒 やや粗土 c 淡褐色 e 良好
17	トレンチ6 上層	五輪塔	火輪のみ	図17の計測値を参照			b 安山岩製

には、トレンチの横に長さ2mほどの崩落した岩塊があり、崖面も上方はかなり崩落している可能性がある。トレンチ西側上方の崖面には方形に石を切り出した痕跡が残っており、東側も崖上の縁にわずかに工具痕がみられた。したがってこの崖面は基本的にすべて石切によって切り崩されていると推定される。さらに西側の支谷にも工具痕が確認できた。その間は土に埋もれているため不明で、上方部の露頭した岩盤には工具痕が認められなかったが、おそらくこの支谷から尾根の北東端までは一連の石切場であると推測される（第4図）。

#### 出土遺物

トレンチ西北隅の表土層下で五輪塔の火輪が出土した（第12図）。それ以外の部位は発見されていない。出土状況からみてもこの位置に設置されていたものではなく、尾根の上に設置されていた五輪塔が落下した可能性が高い。石材は伊豆・箱根系の安山岩製で、やや小型である。製作時期は形態から南北朝～室町時代と考えられる（第17図）。

第16図には復元可能なかわらけを示した。すべて糸切かわらけで、個々の特徴は表3に記載してある。1～7は第6層の上面でやまとまって出土している（第12図、第13図）。造構らしき痕跡は明確ではない。3は小かわらけで煤が付着し、灯明皿である。8は11層中で破碎した砂岩塊に埋もれて出土している（第12図）。9は南側の断崖にほぼ接して7層中から出土している。出土位置は岩盤付近と中層で大きく分かれるが、形態的には大きな違いはない。いずれも14世紀前半代に比定される。

#### （4）トレンチ7

尾根の北東端も垂直に近い状態で岩盤が露出しており、人工的な構造物のある可能性がみられた。そこで露出している岩盤壁面に接する形で、 $3 \times 2\text{ m}$ のトレンチを設定し、トレンチ7とした。

腐植土が崖面付近では約50cmの厚さで堆積し、北東側に向かって傾斜している。腐植土の下は砂粒の混じった土が20cmほど堆積し、その下から岩盤が検出された（第18図）。岩盤は凝灰質砂岩であり、崖面、平面ともに工具痕が明瞭にみられ、石切痕と考えられる（第19図）。地表に露出していた崖面上部は風化により工具痕が不明瞭である。トレンチ範囲では4段の段差があり、北東に向かって下がっていく。2段目や3段目の縁には棒状の工具痕とクサビ痕かとおぼしき痕跡が一部にみられる。トレンチ5や6のように碎石や失敗したため捨てたような切り石はほぼ出土していない。

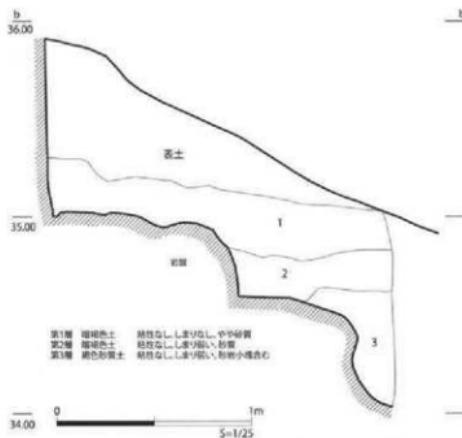
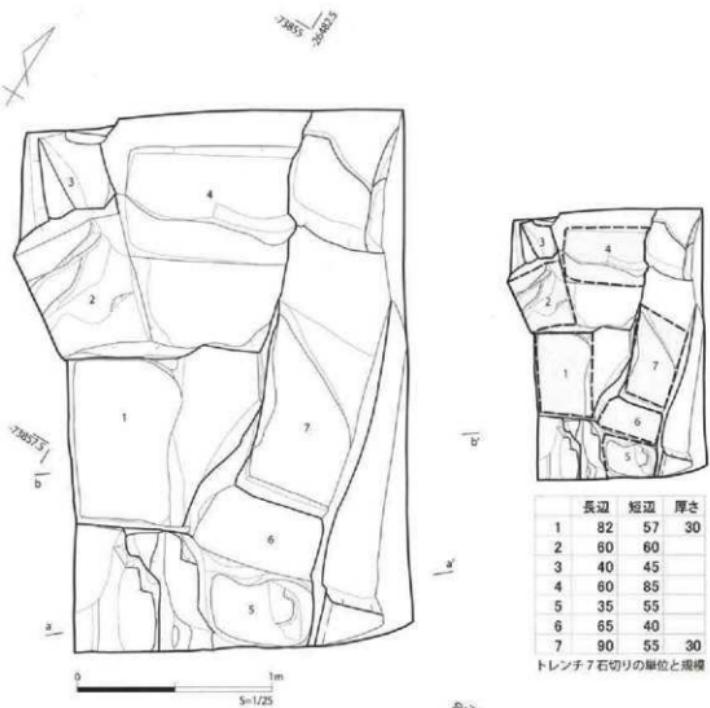
尾根の崖面の形に合わせて石切を行ったためか、平らではなく途中で「く」の字状に曲がり、それに沿った石切りをしている。トレンチ両端部は石を切り落とさないまま残っており、北西隅には切り出しに失敗して石が折れ、それを放置した箇所がある。最低7つの切り出し痕が確認でき、形態、規模はまちまちであるが、長辺80～90cm、短辺50cm前後が一つの目安となる（第18図）。厚さは20～30cmで、30cm前後が多いようである。

トレンチ東南の現在の石段を越えた反対側に岩盤の露頭があり、そこにも石切痕が確認できるため、尾根北東端の石切はさらに南にまで広がっていると考えられる（第4図）。

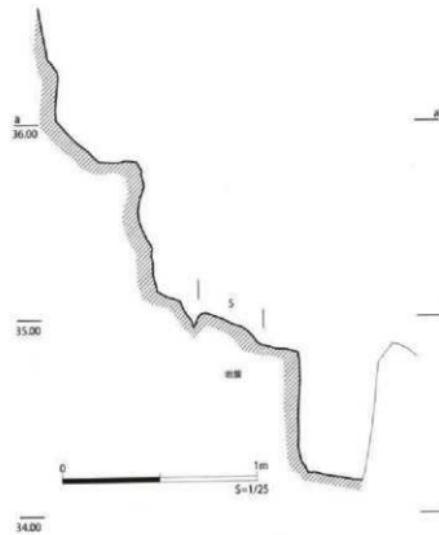
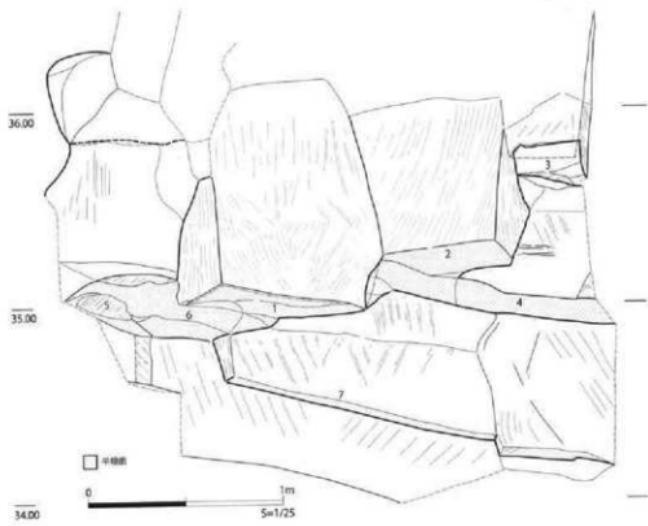
トレンチ横の崖面には「山ノ井」という掘りこみがある。比較的新しいものと思われるが、掘りこまれた時期は定かではない。そのような井戸が周間に存在するかどうかも未確認である。

#### 出土遺物

糸切かわらけの小片が出土しているのみである。



第18図 トレンチ 7 平面・セクション図



第19図 トレンチ7 見通し・エレベーション図

## 第4章 考察とまとめ

鎌倉の地質はほとんどが第3紀の葉山層、逗子層などを中心とする凝灰質砂岩であり、いわゆる「鎌倉石」と呼ばれている。鎌倉石は13世紀半ば以降に礎石、方形堅穴建物の床石、護岸の壁材や基壇、石塔類などさまざまに利用され（大河内1994）、市内各地の遺跡からも多数出土している。掘削技術、石切場、供給体制などについては石切場の調査例自体が少ないこともあり、また工具なども出土しておらず、検討自体があまり進んでいない。本調査で石切跡が確認されたため、中世を含めた鎌倉での石切を中心に簡単にまとめておきたい。

### 第1節 遺構の性格と時期

本調査ではトレンチ4を除くすべての地点で石切跡が確認された。いずれのトレンチでも岩盤直上では遺物を検出していないが、トレンチ6では碎石層の上からかわらけがいくつかまとまって出土しており、石切が終わった後になんらかの活動が行われていたと考えられる。かわらけの年代は14世紀前半頃と推定されるので石切の年代は同時期かそれよりも古く、中世にさかのぼることは確実であろう。トレンチ5およびトレンチ7ではかわらけの碎片のみ出土しているため資料に乏しいが、岩盤の工具痕の状況などからみても一連のもので大きな時期差はないと考えられる。岩盤の露出箇所はほかにも多数あるが、表面観察で石切跡が確認されたのは基本的に本調査地点の周辺で、尾根の北東先端部に集中しているようである。トレンチ5東側では階段状に岩盤が加工されさらに東側の岩盤露頭まで続いているようであり、地表では視認できなくなってしまっているが尾根の先端部は広い範囲で石切がなされている可能性がある。

西瓜ヶ谷やぐら群自体は14世紀代に構築が始まり、15～16世紀まで拡張、改修が続いている（鎌倉市教育委員会2015）。石切跡は現状ではやぐらより標高の低い地点でのみ確認されており、やぐら上方では未確認である。1号やぐらの前庭部は、トレンチ5の調査結果からみると先端部は階段状に石切が行われている可能性が高いが、やぐら自体を破壊してはいないようである。トレンチ3では5号やぐらの前庭部を壊す形でスロープ状に岩盤を掘削していることが判明したが、スロープの構築時期がどこまでさかのぼるかは判断し難い。やぐらの構築と石切は14世紀代に行われ、時期的にはそれほど差がないかもしれない。石切自体はやぐらを避けて行われ中世のうちに終了した可能性があるが、やぐらの供養の場としての機能はその後も継続したと考えられる。

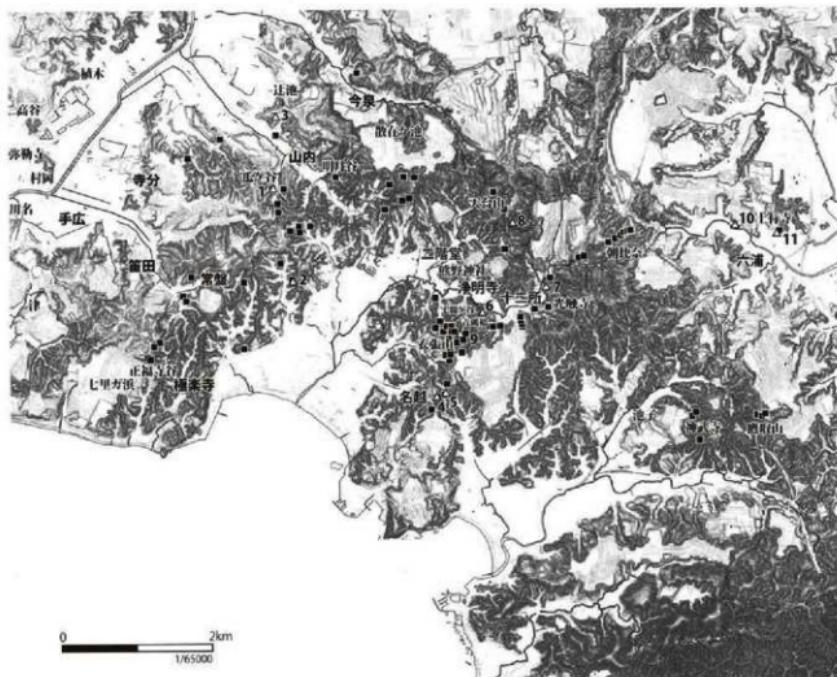
しかし西隣の尾根上に存在したやぐら群（第1図2、現在消滅）では、やぐら自体とその上方を石切によって切り崩してしまっているようである。一部に宝永火山灰が堆積していた状況から石切は15～16世紀まではさかのぼる（鎌倉市教育委員会2015）。隣接するやぐらであるが、その扱いが異なる。

そのほか調査地点東側の尾根に存在するやぐら群（第1図5）では尾根根からやぐらにかけて石切の痕跡が残り（第1図30）、3基確認されたやぐらのうち中央のやぐら上方の尾根頂部にも石切痕がみられる（第1図31）。西側のやぐらの西隣や、西側・中央のやぐらの間も石切によって崩されている。やぐらをある程度避けてはいるものの前面を一部破壊しているようであり、この地点もやぐらの機能が衰退したあとに石切が行われたと推定されるが、その時期は不明で近世・近代にまでおよぶ可能性もある。

東瓜ヶ谷奥の尾根でも多数石切跡を確認している（第1図32～38）。尾根頂上近くをかなり広範囲にわたって石を切り出している箇所もある。中世にまでさかのぼるかどうかは判断が難しいが、瓜ヶ谷やぐら群（第1図7）の近辺も石切場として活用されていたことが明らかである。

## 第2節 鎌倉石の石切場

鎌倉では昭和40年頃まで石切が行われていたようである。近現代のおもな石切場は十二所、淨明寺、二階堂、今泉、名越、極楽寺、山ノ内、植木、深沢、腰越、小坂などである（大藤1977）。鎌倉市以外でも藤沢市の村岡、川口、逗子市の池子、應取山などでも石切が行われている。宅地造成などによって消滅してしまった箇所も多いようだが、現在でも鎌倉市内では丘陵上に石切の痕跡が多数みられる（第



遺跡名	時期	長辺(cm)	短辺(cm)	厚さ(cm)	文献
1 西瓜ヶ谷やぐら群	14世紀	30~120	20~90	13~35	本調査地点
2 宝蓮寺跡	13世紀後半		80	40	原2012
3 亀井若跡	15世紀以前	90~100	40~50	25~30	浜野2002
4 まんだら堂やぐら群南端	中世		44	55	佐藤2002
5 大切厚	中世		80	50	38 佐藤2002
6 鎌倉城	不詳	40~55	30~40	20~30	鈴木2005
7 森戸やぐら	不詳		90	30	20~30 鈴木2006
8 罂峰山・天台山地区トレンチ6	近世以前		33	30	14 神奈川県教育委員会ほか2001
9 杉本城・報恩院地区トレンチ16	不詳				神奈川県教育委員会ほか2001
10 六浦大道やぐら群	不詳	85~100		35	25 神奈川県横浜治水事務所1997
11 上行寺裏遺跡	不詳		60	20~30	15~20 近藤・吉田2009
近代瓦石				95	38 21 大藤1977

第20図 鎌倉および周辺地域の主な石切場（■=現在石切痕の確認ができる露頭）

20図)。比較的大規模に崖面を切り崩している箇所が多く、崖面を横に掘りこんで横穴状の空間となっている箇所もある。多くは近世・近代の石切痕と思われ、中世にさかのほる石切場を特定するのはやや困難である。

発掘により石切跡が確認された例では、13世紀代にさかのほると考えられるのは宝蓮寺跡のみである。第6面の調査区隅で石切跡が確認され、遺跡内で検出した建材を切り出したと推定されている(第20図2)。亀井砦跡(第1図26、第20図3)はJR北鎌倉駅の北西700mの丘陵上にあり、尾根の頂上から南側斜面にかけて604ヶ所もの石切跡が確認されている。矢穴、ノミ痕がみられ、15世紀以前から石切が行われたと考えられている。

逗子市のまんだら堂やぐら群(第20図4)と大切岸(第20図5)でも石切痕が確認されている。まんだら堂やぐら群ではやぐら玄室の前面まで切り落とす、あるいは玄室を壊す形で石切を行った例が確認されている。矩形に石が切り取られ階段状に下がっている箇所もあり、岩盤面の上には碎石層が厚く堆積している。大切岸では平場のトレンチ調査全てで石切跡が確認されている。矩形に階段状に切り出している箇所が多く、大小の碎石層が堆積している。複数の時期にわたる可能性もあるが、中世に行われた蓋然性が高いとされている。まんだら堂ではやぐらの前面まで石切が及んでいるため、本来的な祭祀の対象でなくなった以降に大規模に石切が行われたと推定されている。

時期は不詳だが横浜市の六浦大道やぐら群(第20図10)や上行寺裏遺跡(第20図11)でもやぐらの間やその周辺に石切跡が見つかっている。青砥橋付近の鎌倉城(第20図6)でもやぐらの比較的近くで石切跡が検出されている。森戸やぐら(第20図7)はやぐらの床面を切り出してやぐらを破壊しているが、やぐらの構築時期と石切りの時期差は不明である。

鎌倉旧市街の東北に位置する天台山の山頂付近では、石切痕と層塔未成品と思われる凝灰岩塊が出土している(第20図8)。石塔製作址と推定され鎌倉では唯一の例である。宝永火山灰の堆積がみられたため、時期は近世以前と推定されている。

### 第3節 石切の技術

石切跡は尾根の崖面をほぼ垂直に切り落とし、平面的には層理面で矩形に切り出し、低い方へ階段状に下がるようになっていることが多い。本調査地点でも同様である。

石切の工程について、まんだら堂やぐら群および大切岸では切り取ろうとする矩形の形にノミ状の工具で幅広く深い溝を掘り、一方から層理に従って工具を差しこみ、梃子の要領ではがすように石材を起こす、と推定している。近代の鎌倉石の石切は、平滑な面を作り、そこから鶴嘴で石材の大きさに溝を切り下げ、切り出したい厚みの箇所に數本のクサビ(あるいは矢)を差しこみ石材をはぎとるという工程を取っていた。基本的な工程は中世から大きな変化がないと考えられる。本調査地点でも岩盤に残る工具痕や溝状の痕跡から同様の工程によって石を切り出したと推定される。

凝灰岩の石材の剥ぎ取りは、大阪の棕木石切跡においては中世では棒状工具やクサビなどの工具を打ち込んで石材をはぎとっているという(佐藤2012)。亀井砦では矢穴痕が見られ、矢を使用したとしているが、他の箇所ではそのような言及がない。まんだら堂、大切岸では矢とは断定していないようである。本調査地点では一部に棒状工具の痕跡とクサビ状工具かと思われる痕跡が確認されたが、矢の使用については断定できない。

切り出される石材の大きさについてはやや幅があるが、切り出し失敗例であるまんだら堂や石塔部材と考えらえる山積部の例を除くと、図20に示したように長辺80~100、短辺40~50、厚さ15~

30cm程度の長方形となる。近現代の最大規格の尺石（大藤 1977）とさほど差がなく、基本的な規格についても中世から近現代にかけて大きな変化はないと考えられる。また方形堅穴建物に多用される石材の寸法は80×40×10cmであり（河野 2007）、実際に使用する石材の規格に沿って切り出しているであろうことが推定される。本調査地点の場合はやや変異幅が大きく、建築部材のみならず、石塔の部材などにも利用されたのかもしれないが、廃棄部材からはそこまでの断定は難しい。

石材の流通はやはり検証が困難である。唯一宝蓮寺跡では建物の傍から切り出した石材を建材として使用していると考えられる。西瓜ヶ谷の場合は円覚寺門前遺跡（第1図21～23）から護岸などに鎌倉石を使用した遺構が検出されており、近隣へ石材を供給していたのかもしれないが想像の域をでない。

#### 第4節まとめ

本調査ではやぐらに隣接し、14世紀代にさかのぼりうる石切跡の存在が明らかになった。やぐらと石切の関係についてはなお検討が必要であるが、他の調査例などからやぐらが造成されたのちにさほど時をおかずして石切が行われた可能性がある。塚状地形は自然地形であることが明らかとなった。この尾根はやぐらと一緒に伴う供養の場であり、かつ建築部材としての石材を供給する石切場としての機能も併せ持っている。平場については、平場6などは石を切り出した結果平坦な場所が形作られたと思われ、当初から平場を作り出す意図によって造成されたのではないと思われる。しかし少量ではあるがトレンチ6でかわらけがまとまって出土していることから、石切跡を埋めて平坦にしたあとに何らかの形で利用が行われた可能性はある。この尾根の全ての平場が同様であるとはいはず、個々に検討する必要がある。

やぐらは山ノ内の十王堂橋以東、鎌倉の中とされる地域では数多くみられる。十王堂橋より西はやぐらの数が減少し、柏尾川の対岸の植木や藤沢市の弥勒寺、高谷などまでは分布するものの、やや散漫となる。瓜ヶ谷のやぐらは絶対数こそ多くはないが、玄室内に石塔類の彫刻をほどこす例が多いのが特徴であり、北条氏の信仰との関わりも示唆されている（鎌倉市教育委員会 2015）。寺院との関係は現在のところ明らかではなく、山稜部における交通路との関係がむしろ注視されている。鎌倉の境界域の交通路に沿って造成されたとみられる点が、このやぐら群の重要な特徴の一つであろう。

瓜谷路については、絵図などからみると本来は西瓜川の西側を通っていたと考えられる。近世の門前図に道が描かれておらず、また明治の頃には人が住んでいなかったということなどからすると（湯山 1999）、瓜ヶ谷の奥地は16世紀あるいは近世までやぐらが機能していたが、それ以後しばらくは人の活動もさほどないような状況に至った可能性もある。谷戸の中をどのようなルートで通っていたかは定かではないが、明治初頭の迅速図には西瓜ヶ谷やぐら群の尾根を通る道は描かれていない。しかし台山遺跡で岩盤を掘りこんだ中世の道路が検出されているように、幹線道のほかにもいくつもの枝道が存在していたと思われる。やぐら北側の切通路については今回の調査でも発掘は実施していないので構築時期や構造については判断材料がない。

名越、朝夷奈、大仏坂、积迦堂などはいずれも切通、やぐら、石切跡が一体となってみられる。それらの年代や相関関係はほとんど明確になっていないが、名越切通、まんだら堂やぐら群、大切岸での調査例からすると、中世鎌倉の境界域の切通沿いにやぐらが造成され、需要によってはやぐらを壊しても石を切り出していたことが判明している。またまんだら堂ではやぐらの前の平場で茶毬址が検出されており、朝比奈皆ではやぐら前の平場で茶毬址と納骨穴が見つかっている。瓜ヶ谷の場合は、西瓜ヶ谷やぐら群では未確認であるが、今回東瓜ヶ谷尾根上で確認したやぐら（第1図28）は茶毬址（第1

図10) の検出された平場の直下にある。両者相互の関係は要検討であるが、境界域の交通路沿いにおいてこうした造構がまとまって確認される現象は鎌倉において共通性が高い。西瓜ヶ谷やぐら群を含む瓜ヶ谷は、規模の違いはあると名越切通とまんだら堂やぐら群の状況に類似していると考えられる。大仏切通、朝夷奈切通も同様である可能性が高い。

平場なども土の堆積によって当初の状態と現状で確認できる地形は比較的大きく変化しており、地表からの観察だけではやはり限界がある。こうした交通路との関係や、ぐらが存在する尾根全体の機能の解明についてはさらなる調査・研究を継続していく必要がある。

#### 参考文献

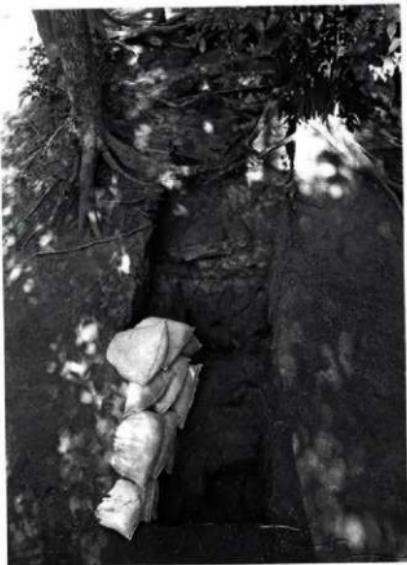
- 大河内勉 1994 「鎌倉における石材利用の実態と動向 -考古成果にみる土木・建築用材の消費について」『中世都市研究』第3号 中世都市研究同人会  
大藤ゆき 1977 「鎌倉の民俗」 かまくら春秋社  
河野眞知郎 2007 「中世都市鎌倉の環境—地形変化と都市化を考える—」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号  
神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・財団法人かながわ考古学財団 2001 「『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査」  
神奈川県横浜水事務所・財団法人横浜市ふるさと歴史財団 1997 「六浦大道やぐら群発掘調査報告書」  
神奈川県立歴史博物館編 2016 「石屋 かながわの歴史を彩った石の文化」  
鎌倉市教育委員会編 1993 「大仏切通周辺詳細分布調査報告書」 鎌倉市教育委員会  
鎌倉市教育委員会編 1996 「坂坂板周辺詳細分布調査報告書」 鎌倉市教育委員会  
鎌倉市教育委員会編 1998 「亀ヶ谷坂周辺詳細分布調査報告書」 鎌倉市教育委員会  
鎌倉市教育委員会編 2001 「切通周辺詳細分布調査報告書」 鎌倉市教育委員会  
鎌倉市教育委員会編 2002 「朝比奈砦発掘調査報告書」 鎌倉市教育委員会  
鎌倉市教育委員会 2015 「神奈川県鎌倉市西瓜ヶ谷やぐら群調査報告書」 鎌倉市教育委員会  
鎌倉風致保存会編 2001 「瑞泉寺裏山周辺詳細分布調査報告書」 鎌倉風致保存会  
近藤匡樹・吉田映子 2009 「上行寺裏遺跡（六浦二丁目5番地やぐら群）II」 かながわ考古学財団調査報告 234  
佐藤重聖 2012 「石材加工技術の交流」『寧波と宋風石造文化』 流古書院  
佐藤仁彦 2002 「神奈川県逗子市埋蔵文化財発掘調査報告書4 史跡 名越切通確認調査報告書」 逗子市教育委員会  
佐藤仁彦 2012 「史跡名越切通整備事業に伴う発掘調査報告書」 逗子市教育委員会  
鈴木庸一郎 2005 「鎌倉城（淨明寺五丁目地内） 平成15年度 鎌倉市内急傾斜地（淨明寺5丁目地区）崩壊対策工事に伴う発掘調査」 かながわ考古学財団調査報告 190  
鈴木庸一郎 2006 「森戸やぐら 平成17年度鎌倉市内急傾斜地（十二所宇佐小路地区）崩壊対策工事に伴う発掘調査」 かながわ考古学財団調査報告 200  
浜野浩美 2002 「亀井砦の調査」『第12回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』  
原廣志 2012 「宝蓮寺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書28」 鎌倉市教育委員会  
湯山学 1999 「鎌倉北条氏と鎌倉山ノ内：得宗領相模国山内庄の様相」 社会福祉法人光友会

写 真 図 版

写真図版 1



トレンチ 4 北側全景（北から）



トレンチ 4 南側全景（南から）



トレンチ 5 および 8 全景（東から）



トレンチ 9 全景（北から）



トレンチ 4 最高地点（南から）



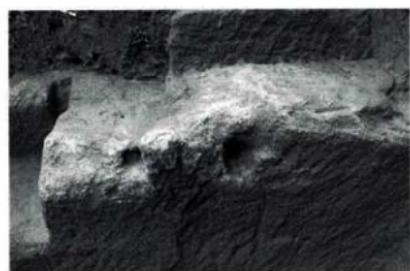
トレンチ 4 北側セクション（南から）



トレンチ 5（北から）



トレンチ 5 中央階段状の石切痕（東から）



トレンチ 5 南壁工具痕（南から）



トレンチ 5 南壁工具痕（北から）



トレンチ 5 中央の工具痕（北から）



トレンチ 5 西側の工具痕（北から）

### 写真図版3



トレンチ5北東隅の落ち込み（東から）



トレンチ5中央セクション（北から）



1号やぐらとトレンチ5,8,9の位置関係



トレンチ8セクション（北から）



トレンチ6および断崖（北から）



トレンチ6完掘状況（北から）



トレンチ6東側中層かわらけ出土状況（北から）



トレンチ6西側中層かわらけ出土状況（北から）



トレンチ 6 南側断崖の工具痕（北から）



トレンチ 6 岩盤面の工具痕（東から）



トレンチ 6 岩盤面の工具痕（東から）



五輪塔出土状況（東から）



トレンチ 6 東側セクション（西から）



東側セクションのかわらけ出土位置（西から）



トレンチ 7 完掘状況（北から）



トレンチ 7 完掘状況（東から）

## 写真図版 5



トレンチ 7 壁際工具痕（東から）



トレンチ 7 奥断崖の工具痕（北から）



トレンチ 7 工具痕（東から）



トレンチ 7 工具痕（東から）



トレンチ 5 東側の岩盤に残る石切痕



トレンチ 5 東南側の岩盤に残る石切痕

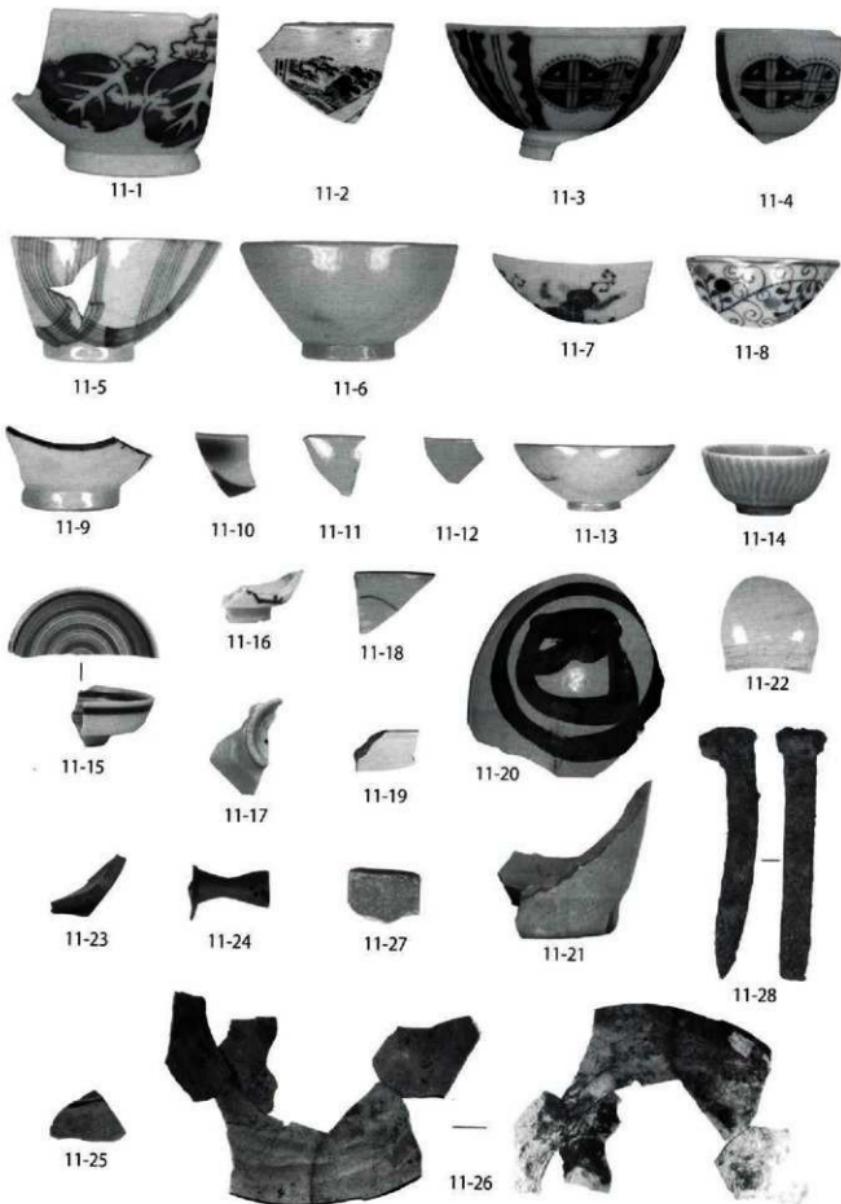


トレンチ 7 東側の岩盤に残る石切痕

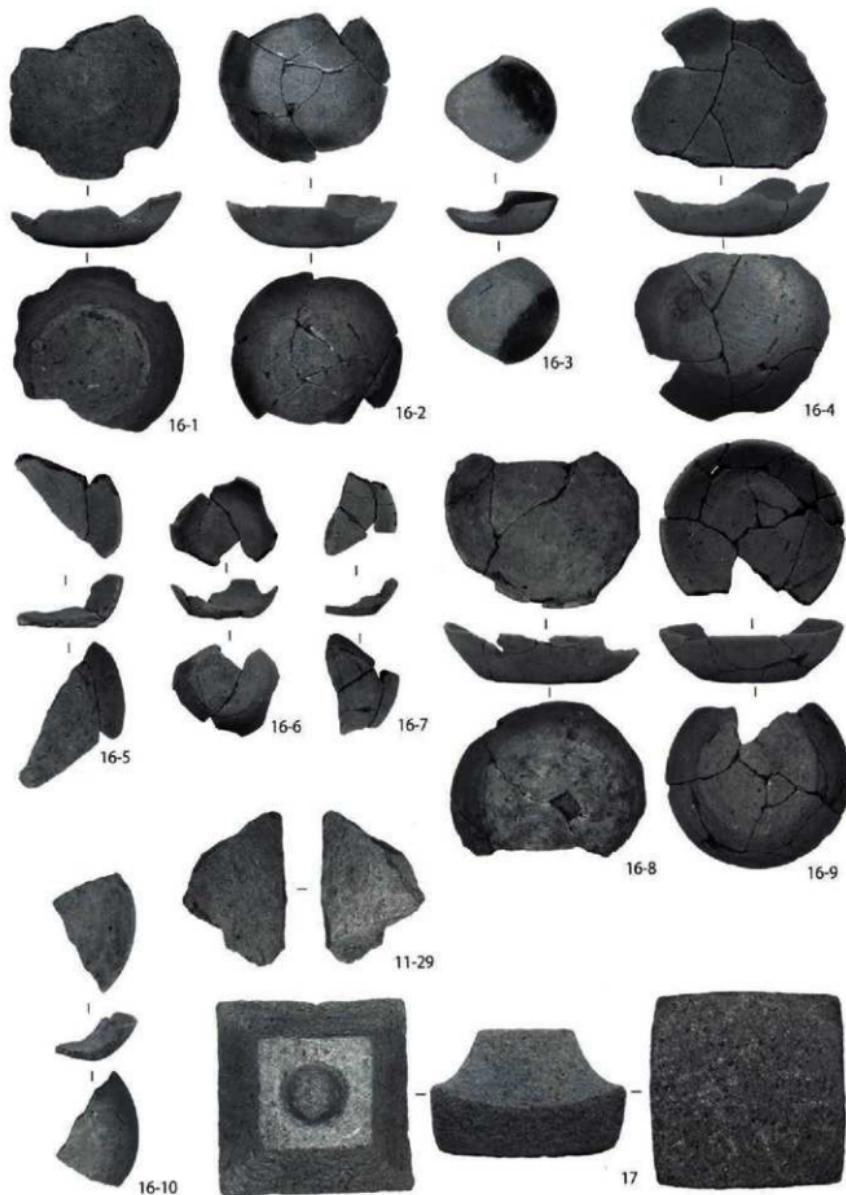


石切痕 3（切通状造構北側）

写真図版6 トレンチ5出土遺物



写真図版7 トレンチ5付近採集およびトレンチ6出土遺物



## 報告書抄録

ふりがな	にしうりがやつやぐらぐんちょうさほうこくしょ						
書名	西瓜ヶ谷やぐら群調査報告書						
副書名	平成27年度 重要遺跡確認調査						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者	永田史子・後藤 健						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号						
発行年月日	西暦2017年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
にしうりがやつやぐらぐん 西瓜ヶ谷やぐら群	神奈川県鎌倉市 山ノ内字西瓜ヶ谷 1100番外	14204	319	35° 20' 6"	139° 32' 32"	20160112 ～ 20160301	80.95 重要遺跡 確認調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
にしうりがやつやぐらぐん 西瓜ヶ谷やぐら群	やぐら	中世 (14・15世紀代)	やぐら・ 石切場	かわらけ、陶磁器、 五輪塔、板碑	

神奈川県鎌倉市  
西瓜ヶ谷やぐら群調査報告書  
平成27年度重要遺跡確認調査  
発行日 平成29年3月31日  
編集・発行 鎌倉市教育委員会  
印 刷 中川印刷株式会社